

## タル・タバン出土碑文（1997-1999年度発掘調査）

シュテファン M マウル\*

(Stefan M. Maul)

(訳) 柴田大輔\*\*

シリア北東部ハブール川流域、現在のハッサケ市南方に位置する遺跡タル・タバンは、1997年から1999年の間合計3シーズンに渡り大沼克彦隊長率いる国士舘大学調査隊の手によって発掘された。この調査による成果の一つに多数の文字資料の発見がある。これは日本隊による発掘調査としては初めての快挙であり、中近東における発掘調査全体の視点から見ても注目に値する発見であった。大沼隊長は、当該文書の解説と分析をハイデルベルク大学のシュテファン・マウル教授に依頼し、その成果をまとめた独文報告書 *Die Inschriften von Tall Ṭābān (Grabungskampagnen 1997-1999): Die Könige von Ṭābētu und das Land Māri in mittellassyrischer Zeit*, Acta Sumerologica Supplementary Series 2, Tokyo, 2005が昨年出版された。以下に和訳するのは、日本のより幅広い読者に研究成果を紹介するためマウル教授が作成した原稿である。

タル・タバンから出土した文字資料は、中期アッシリア時代に現在のタル・タバンとその周辺を支配し、またマリ国王を自称していたある小王国の君主が残した建築碑文であった。この碑文より、タル・タバンがマリ国王の居城タベトゥ市であった事、マリ国がアッシリア帝国に服属しつつも他の属州とは異なり一定の独立を保っていた事、そしてマリ国王を自称する支配者の家系が少なくとも前13世紀末から前11世紀にかけて綿々と当地において続いていた事が明らかになった。さらに、この家系がアッシリア王家の傍系に連なる可能性も浮かび上がった。このような王国に関する情報は、前二千年紀後半のアッシリア帝国による属領行政の予期せぬ新しい側面を伝えるものであった。また、碑文は、タベトゥ市が城壁と城門から成る防御施設によって守られていた事、市内には天候神アダドと治癒女神グラの神殿があった事など、タベトゥ市の地誌についても貴重な情報をもたらす。

(訳者)

## は じ め に

1996年9月、大沼克彦教授の指揮の下、国士舘大学イラク古代文化研究所（東京）は、北東シリア地方の中心都市ハッサケ周辺における一般調査を実施した。長期間に渡りイラクにおいて行われた発掘調査の後、考古調査をシリアへと拡大する必要があったのだ<sup>1</sup>。そのためにふさわしい遺跡が探し出され、白羽の矢は、ハッサケ市の南東19kmハブール川東岸に位置する偉容を誇る遺跡タル・タバンに立ったのであった<sup>2</sup>。

\* ハイデルベルク大学西アジア言語文化学科教授

\*\* 学術振興会特別研究員（筑波大学）

1 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 1を参照。

2 この遺丘は、南北方向に約350m、東西方向に約330m広がり、周辺地表との高低差は、最大で26mになる（詳細に関しては、Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 3ff. 並びに同Pl. 1-5の写真を参照）。

この遺丘は、大沼教授の指揮の下、1997年、1998年、そして1999年に行われた三度の発掘によって調査された。まず、テルの北西斜面に小さな試掘溝が開けられ<sup>3</sup>、この試掘溝が徐々に拡張された<sup>4</sup>。その結果、13の文化層が確定された<sup>5</sup>。墓一基とわずかな残存物のみが確認されている最上層はヘレニズム時代に帰属する（第1層）<sup>6</sup>。続く二つの層（第2層並びに第3層）を構成する城壁跡と幾つかの埋葬跡は新アッシリア時代に由来する<sup>7</sup>。その下に位置する第4層から第9層は、中期アッシリア時代に帰属する<sup>8</sup>。この層からは城壁と煉瓦敷が出土したが<sup>9</sup>、それが属した建築的脈絡を突き止めるには、試掘溝の広さは十分ではなかった。しかしながら、勾配の急なテルの斜面という位置は、中期アッシリア時代に由来するこの建築址が、丘の居住地を敵対勢力から守る防御施設と密接な関係にあったことを示唆する。タル・タバンの発掘において発見された文字資料は、専ら、中期アッシリア時代に属する第5-9層、あるいはテルの麓にあった瓦礫層（“Middle Assyrian drifted layer”）<sup>10</sup>に由来する。粘土板文書1点の他、「マリ国王」を自称する中期アッシリア時代の領主の碑文が記された土製円筒（クレイシリンダー）9点の断片、煉瓦断片46点、壁装飾土製釘（クレイネール）の断片13点、そして土器断片2点が見つかった。出土した碑文は、タル・タバンのこれら「マリ国王」達の居城であったことを確証する。この居城はタバトゥという名で呼ばれていた<sup>11</sup>。残念なことに、原位置にて見つかった碑文付きの煉瓦、土製円筒、壁装飾土製釘は一点も無かった。第10-13層からは一点も碑文が見つかっていない<sup>12</sup>。しかし、城壁址をも有するこの層がミタニ時代に相当する可能性を、この層において見つかった土器は示唆する。調査された試掘溝では、第13層の下にて岩盤に到達したようなように見える。しかし、タル・タバンは、より古い時代から居住されていたと推測できる。この点を示唆する論拠として、まず、既に古バビロニア時代この都市が存在していたことを証言する文字資料が挙げられる<sup>13</sup>。さらに、これまでに見つかった土器も論拠になる。「トレンチ1」の区域からはハッスーナ土器の破片と前三千年紀に典型的な土器が発見されている<sup>14</sup>。それどころか、テルの麓からは旧石器時代中期の石器も見ついている<sup>15</sup>。

発掘調査に従事した研究者は、新たに発見された中期アッシリア時代の王碑文が、数年前わずか数キロメートルしか離れていないタル・ブデリから出土したものと極めて類似していることに即座に気がついた<sup>16</sup>。タル・ブデリから出土した中期アッシリアの地方領主の碑文を編纂する任務は筆者に課されていたため<sup>17</sup>、大沼克彦教授は、タル・タバンの出土碑文も出版することを筆者に提案した。そして、雅量を示すこの提案を筆者は喜んで引き受けた。このような経緯で、国士舘大学イラク古代文化研究所（東京）の招待により、1999年秋における発掘調

3 トレンチ I. Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 4 の地図を参照。

4 トレンチ II 並びに トレンチ III. Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 4 並びに Ohnuma/ Numoto 2001: 4 の地図を参照。

5 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 9 を参照。

6 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 8。

7 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 8。

8 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 11, Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 4-7, Ohnuma/ Numoto 2001: 3-10。

9 Ohnuma/ Numoto 2001: 5 の図版を参照。

10 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 9-10 と Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6 を見よ。

11 タバトゥと呼ばれている事例も一点ある（文書 2, 第 1 行）。

12 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 11-12 並びに Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 7。

13 Groneberg 1980: 243 を参照。

14 Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 7。

15 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 5-7。

16 タル・ブデリ発掘の仮報告 Pfälzner 1989/ 90 並びに Maul 1992: 9 Anm 4 に挙げられている文献を参照。

17 Maul 1992。

査の期間中（このあとすぐ明らかになるように、歴史的に極めて重要な）タル・タバン出土碑文を研究し、その楔形文字書写を作成する機会を筆者は得た。このような貴重な研究資料に携わることが出来たのは筆者にとってこの上ない名誉であり、シリア政府考古局、そして誰よりも大沼克彦教授と国士舘大学イラク古代文化研究所にこの旨心より深謝の意を表したい。

筆者の研究成果は、タル・タバンにおける発掘の続行が極めて重要な意義をもたらすであろう事に疑いの余地を与えない。城郭区域と市街地区域における更なる発掘によって即座に数多くの王碑文が出土し、アッシリアに任命された地方領主が中期アッシリア帝国の拡大と強化において果たしていた役割を知るための情報が得られる可能性があるだけではない。「マリ国」における属州経営に関する最初の文字資料と見なすことができる粘土板一枚の発見は、城塞区域の更なる発掘が巨大な粘土板文書庫を掘り当てる可能性の少なくないことを示唆するのである。そのような発見は、アッシリアの属州行政、就中、中期アッシリア時代におけるハブール川流域の行政管理に関する我々の知識を著しく拡大することになるだろう。「マリ国王」達の碑文より、中期アッシリアの城塞都市タベトゥが幾度も修復された防壁と（少なくとも）一つの城門によって守られ、都市の中には、王宮並びに天候神アダドと治癒女神グラの神殿があったことを我々は知っている。広くもある程度見通しのつくこのテルにおける更なる発掘は、おそらくそれほど大きな労力を投じることも無く、中期アッシリアの属州主都の構造に関する明確な形象を我々にもたらす可能性を有しているのだ。

シュテファン M. マウル 2005年4月

### タベトゥの王達と中期アッシリア時代におけるマリ国

1921年、すでに E. フォラ (Forrer) は、偉観を誇る居住丘タル・タバンの下に、ハブール川に隣接していた古代都市タベトゥの遺跡が埋もれているのではないかとの見解を発表した<sup>18</sup>。タベトゥとは、タバトゥという名で古バビロニア時代の文献資料に歴史上初めて登場し、その後、中期並びに新アッシリアの資料において頻繁に言及される都市である。フォラによって提案されたこの遺跡の同定は、当地において発見された中期並びに新アッシリア時代の土器によって論拠づけられ、タル・ブデリにおける碑文の発見によりついに確証された<sup>19</sup>。タル・ブデリにて出土した「マリ国王、アッシュル・ケティ・レシエル」の円筒碑文に、タル・ブデリ（古代名ドウル・アッシュル・ケティ・レシエル）がマリ国王達の居城であった「タベトゥの上方」に位置していた、という言及が見つかったのである<sup>20</sup>。この言及に従うと、古のタベトゥは、タル・ブデリからさして遠くはない場所にあっただけではなく、タル・ブデリの「下方」、すなわち遺跡が隣接するハブール川の川下に位置していたことになるのだ。そして、その候補地は、タル・ブデリ／ドウル・アッシュル・ケティ・レシエルの南方 6 km に位置する大きな遺丘タル・タバンしかなかった。ここに紹介するタル・タバンから出土した「マリ国王達」の数多くの建築碑文は、タル・タバンこそがタベトゥの遺跡であることを最終的に証明した。

18 Forrer 1921: 144.

19 Maul 1992 を見よ。

20 Maul 1992: 22, 2.

「タベトゥとその周辺地域」が中期アッシリア時代において「マリ国」と呼ばれていたことは<sup>21</sup>、タル・ブデリから出土したアッシュル・ケティ・レシエルの碑文によって初めて知られるようになった。この極めて限定された領地を、前12世紀から前11世紀の変わり目にアッシュル・ケティ・レシエルが支配していたのだ。もっとも、強力なアッシリア王ティグラトピレセル一世（前1114-1076年）の一代官としてではあるが。「我父たる前任の王達がタベトゥとその周辺地域を領有していた」というアッシュル・ケティ・レシエルの証言が持つ歴史的信憑性も<sup>22</sup>、タル・タバンの出土したこの新しい碑文により鮮やかに証明された。同じくマリ国王であった、アッシュル・ケティ・レシエルの父<sup>23</sup>や祖父<sup>24</sup>の建築碑文が発見されただけではない。ここに発表される新しい碑文の発見によって、遥かに古い年代、おそらくトゥクルティ・ニヌルター一世の時代までマリ国王朝の家系を途切れなしに辿る事が出来るようになったのである。また他方では、アッシュル・ケティ・レシエルの孫がまだタベトゥに居城を構えており、「マリ国王」という称号を名乗っていたことも示唆されるのだ。

上述のアッシュル・ケティ・レシエルの父親であり同時にその前任の王がアダド・ベール・ガベという名前であったこと、さらに、彼の父であり前任の王がアダド・ベール・アプリという名前であったことは、タル・ブデリから出土したアッシュル・ケティ・レシエルの碑文より既に知られていた。このアダド・ベール・アプリ — アダド・ベール・ガベ — アッシュル・ケティ・レシエルという王位継承の順番は、今回発見されたアッシュル・ケティ・レシエルの碑文によっても確認された<sup>25</sup>。タル・ブデリから出土した円筒碑文により、アッシュル・ケティ・レシエルがアッシリア王ティグラトピレセル一世（前1114-1076年）の同時代人物であり、またベール・リプールが紀年職を務めた年である前1096年の時点においてマリ国王として統治していたことが明らかになっていた<sup>26</sup>。タル・タバンの出土した新たに発見されたアッシュル・ケティ・レシエルの祖父アダド・ベール・アプリの碑文は、さらにこの二代前の王の治世を年代的に位置づけるための手掛かりを提供する。当該の碑文には、イナ・イリヤ・アラクが紀年職を務めた年に文書が作成された旨が付記されているのである<sup>27</sup>。この年は、アッシリア王ティグラトピレセル一世の治世6年、すなわち前1109年であろうと考えられている<sup>28</sup>。祖父の治世の終わりと孫の治世の始まりの間には、最大で12年の開きがあった事になるのだ。無論、両王の治世の間に位置するアダド・ベール・ガベの治世がこの期間を超えることはない。

アッシュル・ケティ・レシエルの祖父アダド・ベール・アプリの建築碑文も、期待通り、この王の前任者達についての情報をもたらす家系を記載している<sup>29</sup>。しかし、家系を記載している箇所は破損がひどく、アダド・ベール・アプリの父の名前と称号は欠損しており、祖父<sup>30</sup>についても部分的にしか残っていない。しかし、この三代前の世代は、「[...] エテル・ピ」 — アダド、同じくマリ国王」と難なく補うことができる。何か明確ではない理

21 Maul 1992: 29, 4 を見よ。

22 Maul 1992: 29, 3-4。

23 文書 3。

24 文書 2。タル・ブデリからも、アッシュル・ケティ・レシエルの祖父であったアダド・ベール・アプリの短い碑文の記された煉瓦が見つかる（Maul 1992: 45, Ziegel 7 を参照）。

25 文書 4, 第 1 行並びに第 2 行。文書 5-8, 第 1 行並びに第 5 行。

26 Maul 1992: 15f. を見よ。さらに、文書 5-8, 第 21 行より、ティグラトピレセル時代に紀年職を務めたムダメク・ベール在職の年も、アッシュル・ケティ・レシエル在位時代に位置づけられる事が明らかになった。

27 文書 2, 第 1' 行。

28 Freydank 1991: 87 を見よ。

29 文書 2, 第 3 行。

30 欠損部分の大きさから言っても、当該の箇所にアダド・ベール・アプリの父ではなく祖父が言及されていることは確実。



由からアダド・パール・アプリの建築碑文では、他では一般的な三世代の家系記載に四代前の世代が付け加えられており、そこに、アダド・パール・アプリの曾祖父の名が言及されている。彼の名はアダド・パール・ガベと言う。このように、アダド・パール・アプリの碑文は、マリの地を支配していたアダド・パール・ガベという王が一人ではなく、少なくとも二人はいたことを証言する。以後、アッシュル・ケティ・レシエルの父であったアダド・パール・ガベはアダド・パール・ガベ二世（仮）と呼ぶことにするが、このアダド・パール・ガベ二世（仮）はその高祖父（アダド・パール・ガベ一世（仮））か、もしくは他の誰か、さらに古い同名をした開祖から名前を取ったのであろう。アダド・パール・ガベ一世（仮）が上述の通りエテル・ピー・アダドの父であったことは、アダド・パール・ガベをその父として言及するエテル・ピー・アダドのある煉瓦碑文によって証明される<sup>31</sup>。

今ここに確定されたマリ国王達の継承順番（アダド・パール・ガベ一世（仮）— エテル・ピー・アダド — 某 — アダド・パール・アプリ — アダド・パール・ガベ二世（仮）— アッシュル・ケティ・レシエル）には、まだエテル・ピー・アダドの息子であり同時にアダド・パール・アプリの父親であった人物の名前が欠けている。しかし、年代的根拠から、この人物の名前がマヌ・ル・ヤーウであったに相違ない、と推定することができる。アッシリア王ニヌルタ・トゥクルティ・アッシュル（前1133年）の極めて短い治世に作成された行政文書が多数アッシュルに残っているのだが、そこにはマヌ・ル・ヤーウという名のタベトゥ領主からの物品の配達記録されている。この文書によれば、マヌ・ル・ヤーウという人物が前1133年タベトゥにおいて王として君臨していたことになる。アッシュル・ケティ・レシエルの治世に属する事が確定された日付である前1096年、そしてマヌ・ル・ヤーウの治世に属する事が確定されたこの日付前1133年の間、37年間に四世代の王達（マヌ・ル・ヤーウ — アダド・パール・アプリ — アダド・パール・ガベ二世（仮）— アッシュル・ケティ・レシエル）が在任していたと考えることは十分に可能であるが、五世代あるいはそれ以上の王達の在任は考えにくい。よって、マヌ・ル・ヤーウがアダド・パール・アプリの父親であり、またエテル・ピー・アダドの息子であったと考えざるを得ない。さらに、アダド・パール・ガベ二世（仮）のある碑文から、マヌ・ル・ヤーウの息子が [...] *-aplu* で終わる名前を所持していたことが明らかになっている<sup>32</sup>。上で当該の世代の王として仮定した人物の名前であるアダド・パール・アプリ以外に、この名前に相当する候補はない。このマヌ・ル・ヤーウの碑文は既に見つかっているが<sup>33</sup>、彼の前任者に関しては残念ながら記述がないか、あるいは残っていない。

煉瓦の破片7点<sup>34</sup>と土製釘の破片1点<sup>35</sup>から再構成されるエテル・ピー・アダドのある碑文は、エテル・ピー・アダドには（マヌ・ル・ヤーウの他に）エンリル・アブラ・ウツルという名の別の息子がいた、という興味深い情報を提供する。しかし、このマヌ・ル・ヤーウの兄弟が王位に即いたことは無かった、と考えて良からう。

同一の碑文が記された数多くの煉瓦は、さらに別のあるマリ国王に由来する<sup>36</sup>。これまで中期アッシリア時代の資料に登場することがなかったその王の名をリーシュ・ネルガルと言う。かれは、アダド・パール・ガベという名の王の息子であった。このリーシュ・ネルガルが前述のアッシュル・ケティ・レシエルの兄弟であり、その父アダド・パール・ガベ二世（仮）の第二の後継者として兄（弟）の王位を継承した可能性も排除することは出

31 文書18。

32 文書3，第3行。

33 文書19，文書58，さらにおそらく文書59。

34 文書11-17。

35 文書66。

36 文書20-36。

来ない<sup>37</sup>。しかし、可能性は低い。確実にアッシュル・ケティ・レシエルに帰属する碑文の断片がより上層の後代の層位から出土している一方で、確実にリーシュ・ネルガルの碑文が記された煉瓦の断片は、(唯一つの例外を除き<sup>38</sup>) 全てより下層の中期アッシリア層、8b層から9b層、から出土しているからだ。よって、リーシュ・ネルガルがアダド・バール・ガベ一世(仮)の息子であった可能性は十分にある。もしその説が正しければ、彼はエテル・ピー・アダドの兄弟であり、父親の地位を継承したか、あるいはその兄弟の後に王位に即いた、と考えられる。第一のケースの場合、リーシュ・ネルガルは子を授かることなく若死にしたと推測される<sup>39</sup>。第二のケースの場合は、例えば早くに世を去ってしまったエテル・ピー・アダドの弟としてリーシュ・ネルガルが王位を継承し、その後、王位はエテル・ピー・アダドの息子達の上に戻った、と推測される。しかし当然全て憶測の域を出ない。何故なら、リーシュ・ネルガルが第三のアダド・バール・ガベの息子であり、この第三のアダド・バール・ガベは同名の王達の治世以前に君臨していたという可能性も排除できないからである<sup>40</sup>。

最後に挙げた解決案が正しい場合、アッシュル・ケティ・レシエルが前1096年にタベトゥの王位に君臨していた以前、少なくとも七世代に渡ってマリ国王位が父から息子へと継承されていたことになる。さらに、長期間で見た場合一世代の交代が平均して約25年周期に行われ、また前1096年の段階でアッシュル・ケティ・レシエルの四半世紀が既にその半分を過ぎていた、と仮定した場合、リーシュ・ネルガルの父に相当する古い時代のアダド・バール・ガベが前13世紀の中頃王位に即いていたと推測される。これは、アッシリア王トゥクルティ・ニヌルター一世(前1243-1207年)がその遠征を開始し、ハナヤラピクと並んでマリ国にもアッシリアに対する進貢の義務を負わせた時期である<sup>41</sup>。リーシュ・ネルガルの父親であったこの古い時代のアダド・バール・ガベがタベトゥの王朝の開祖なのだろうか。この王朝がアダド・バール・ガベと言う王名に抱いているかのように見える幾ばくかの愛着が、上述の仮説を支持する材料になり得るかもしれない。

奇妙なのは、マリ国の王達全員がトゥクルティ・ニヌルター一世の時代に遡るまで一人の例外もなくアッシリア風の名前を名乗っていたことである。この事実によって、「タベトゥ領主の王朝がアッシリア起源」であり、タベトゥの領主が「トゥクルティ・ニヌルター一世時代既にアッシリアの宗主権下に置かれていたかもしれない」、という Maul 1992: 49 にて慎重に検討された可能性の蓋然性が俄然増して来る。タベトゥの王朝の開祖がアダド・バール・ガベという名前を名乗っていた可能性があり、またおそらくトゥクルティ・ニヌルター一世の時代に「マリ国」の支配権を獲得したと考えられるため、以下の仮説も否定できない。すなわち、タベトゥの王朝の開祖であったアダド・バール・ガベが、おそらく「トゥクルティ・ニヌルター時代初期」に紀年職を務めていたアダド・バール・ガベという名のアッシリア王子と同一人物であったのではなかろうか、という仮説である(フライダंक (Freydank) によれば「彼が(トゥクルティ・ニヌルター時代)後期に(紀年職を)務めていた可能性はない」と言う)<sup>42</sup>。この後者のアダド・バール・ガベがトゥクルティ・ニヌルター一世の兄弟であったのか、あるいは息子であったと考えることが出来るのかは、目下の所分からない<sup>43</sup>。

帝国における高位の職、知事と外務大臣の位に王家の一員を就けることにより、それらの地位を「アッシリア

37 リーシュ・ネルガルがアダド・バール・ガベ二世(仮)のすぐ後の後継者であった可能性は、年代的な理由より極めて低い。

38 文書28は表採。

39 これは、エテル・ピー・アダドの息子がマリ国王の位を継承していることに基づく。

40 この年代の問題に関し、碑文に用いられた文字の形体の分析から有用な材料を引き出す事は出来ない。

41 これについては Maul 1992: 53f. を参照。

42 Freydank 1991: 49。

43 Freydank 1991: 49-50 を見よ。

王家の傍系」に移譲するということがトゥクルティ・ニヌルタ時代において全く異例ではなかったことは、E. カンジク-キルシュバウム（Cancik-Kirschbaum）によって指摘されている通りである<sup>44</sup>。よって、おそらくアッシリアの王達の委託により「タベトゥとその周辺地域」を長い世代に渡って支配し<sup>45</sup>、また王の称号を名乗ることが許された王朝が、アッシリア王家と血筋において近い関係にあったということもあながち考えられないことではない<sup>46</sup>。もしこれらタベトゥの王達の開祖が本当にアッシリア王トゥクルティ・ニヌルター一世の息子（あるいはシャルマネセル一世（前1273-1244年）の息子）であったとしたら、*māt Māri*「マリ国」の独特な綴り方に関して全く別の説明ができるかもしれない。最も頻繁に使われた綴り方は、*māru*「息子」と読まれた文字 A を用いたものである。国を指す文字（KUR）と組み合わせられることによって作られた KUR A という文字の結合は *māt māri* と読まれたが、この語は「マリ国」の他に「息子の国」と解することも出来る。かつて強大な勢力を誇り、またその忘れ去られぬ伝統にこそタベトゥの領主達は自らを位置づけようとしたマリ市という名の妙なる響きに更なる意味が込められていたのかもしれない。マリ国の支配権を託されたのが、アッシリア王の「息子」であったという自負が。

Maul 1992: 51 における推測に反し、アッシュル・ケティ・レシエルはその王朝における最後の支配者ではなかったようだ。煉瓦の断片三つにわずか残部としてのみ残る碑文は、アッシュル・ケティ・レシエルの孫がタベトゥに君臨していた可能性を示唆している。

締めくくりに、タベトゥのさらなる王の名前が記録に残っている可能性を指摘しよう。ニネヴェから出土したある中期アッシリアの行政文書には、「アダド・アブラ・イディナ、タベトゥの人」と呼ばれるある人物が言及されている<sup>47</sup>。彼は、アッシリアの高官達、カトムフの領主達、ニネヴェ、シャディカニ、カトニの知事達と並んで、数量のワインをアッシリアの王か、あるいは神殿に納めている。この文書の年代がまだ不確定であるため<sup>48</sup>、当該のアダド・アブラ・イディナがアダド・ベール・ガベ一世（仮）治世以前、あるいはアッシュル・ケティ・レシエル治世以後にマリ国を治めていたのかは、確言できない。

ハブール川流域にあったこの小さな王国がいかなる末路を迎えたのか、残念ながらまだ何も分かっていない。後代の文書においてタベトゥは、新アッシリア時代の王アダド・ニラリ二世（前911-891年）とトゥクルティ・ニヌルタ二世（前890-884年）の遠征において立ち寄られた場所として唯二度のみ言及されている。

ユーフラテス川流域のマリ（テル・アル・ハリリ）が滅亡した後、ハブール川流域あるいはユーフラテス川中流域における幾つかの地方領主がその支配下にあった地域を指すのにこの誉れ高い *māt Māri* という名を用いたようだ。中期アッシリア時代の王アッシュル・ベール・カラ（前1073-1056年）の年代記から、この王が「マリ国

44 Cancik-Kirschbaum 1999。

45 Maul 1992: 29, 4 を見よ。

46 マリ国王達の碑文によって、（中期）アッシリアの王達ではなく、その家臣に由来する碑文が初めて知られる所となった。中期アッシリア時代の他の知事達もまたそれぞれの州都に於いて王碑文を建築物の定礎に残したのだろうか。あるいは、アッシュルに宮殿を構えていたアッシリア王の碑文の文体を手本に作成された碑文を残す事をマリ国の王達に許したのは、その出自と王号なのであろうか。目下の所まだ明らかになっていない。

47 Millard 1970: 172-173 並びに Pl. XXXIII-XXXIV。

48 Millard 1970: 172-173 によると、この行政文書は前12世紀の中頃に作成されたと言う。それに対し、J. N. ポストゲイト（Postgate）はこの文書を「おおよそティグラトピレセル一世治世時代に」年代づけている（*Reallexikon der Assyriologie* 5, 487b s.v. Katmuhu）。

王トゥクルティ・メール」に対して二度遠征を行ったことが知られている<sup>49</sup>。この「マリ国」は、ハブール川流域のタベトゥに君臨した王達の「マリ国」と同一のものではないようだ。E. ワイドナー（Weidner）が指摘しているように、「マリ国王トゥクルティ・メール」は、「その国の平安とその命の守護のため」シッパルのシャマシュに石製の笏を献納した「ハナ国王トゥクルティ・メール」と同一人物であった可能性が高いからだ<sup>50</sup>。他、ユーフラテス川中流域に位置するスフを前8世紀に支配していたアッシリアの代官達の碑文が知られている。その家系はバビロンのハムラビまで遡ると言うこの代官達は「スフ国とマリ国の代官」を自称している。しかし、彼らは、ユーフラテス川流域のマリもタベトゥ周辺地域も支配下に置いていなかった<sup>51</sup>。アッシュル・ケティ・レシエルとその前任者達と同様、彼らも、自らをユーフラテス川流域におけるかつての強大なマリの伝統に位置づけるため *māt Māri* の名を用いたと考えられる。もっとも彼らの称号においてマリ国の名は時として欠落する物であったことが特筆されるが。少数ながら古バビロニア時代以降の文書に見つかっている *māt Māri* の事例は、ユーフラテス川流域に位置する有名なマリ（テル・アル・ハリリ）を指しているのではない。そもそもこのマリ市は、ハムラビによって破壊された後、二度と居住されることがなかったのだ。

以下に発表する王碑文は、マリ国王朝の時代における歴史的イベントに関して情報をもたらすものではない。我々は、アッシュル・ケティ・レシエルによる以下の証言で満足する他はない。曰く、彼の前任者達はただ「タベトゥとその周辺地域を領有していた」<sup>52</sup>。この状況に対し、アッシュル・ケティ・レシエル自身がマリ国の勢力範囲を拡大し始めた。この政治的決断がいかなる結末を引き起こしたのか、我々は知らない<sup>53</sup>。タル・タバン出土の新しい碑文は、タベトゥの地誌に関し、無味乾燥ではあるものの、幾つかの情報を提供する。都市は、防壁、土塁、そして少なくとも一つの城門から成る防御施設によって守られており、この防御施設をマリ国の王達は何代にも渡って幾度も修復して来た。これに関するアッシュル・ケティ・レシエルの建築碑文は、幾つものサンプルが残っている（文書5-8）。都市の城壁の内側には、アダドの神殿があった。おそらくこの神がタベトゥの都市神であったのだろう<sup>54</sup>。文書3によると、アダド・ベール・ガベ二世（仮）は朽ち果てたこの神の社を再建したと言う。その息子アッシュル・ケティ・レシエルは、タベトゥにおけるアダド神殿再建を続行し、当該神殿を拡大した（文書9、他おそらく文書4）。天候神の神殿が存在していたことは、その他、漏斗型をした土製釘2点に記された保存状態の悪い簡潔な建築碑文も証言している（文書64、文書65）<sup>55</sup>。前1109年に作成されたアダド・ベール・アブリの建築碑文（文書2）より、タベトゥにはグラの神殿も存在していた事がわかっている。この治癒女神の他の多くの神殿と同様、そのシュメル語尊称はエガルマフ<sup>56</sup>と呼ばれた。神殿は、朽ち果てた後、前12世紀末期に再建された。煉瓦の断片七点（文書11-17）と土製釘の断片一点（文書66）から再構成されるエテル・ピー・ア

49 Weidner 1935: 336-338, Borger 1964: 135-136, Grayson 1976: 46 並びに 49。

50 Weidner 1935: 336ff. 当該の碑文に於いてトゥクルティ・メールは、同じく「ハナ国王」の称号を持つイル・イキーシャという名の父親に言及している。

51 Cavigneaux/ Ismail 1990: 327。

52 Maul 1992: 29, 4。同 39, 3 も参照。

53 これについては Maul 1992: 50-51 を参照。

54 これを示唆するのは、王名の神名要素としてアダドが好んで選ばれたという事だけではない。多くの神々が呼び出される場合、アダドが常に最初に（マルドゥク、シン、シャマシュの前に）言及されている事も見落としてはならない（Maul 1992: 29, 17f. 並びに同 37, 13 さらに文書6, 第2'行を参照）。

55 両方の文書とも、建築主たる王の名前は残っていない。

56 「崇高なる社殿」



ダドの碑文のみが、この王が「彼の息子エンリル・アブラ・ウツルのために建立させた」建築物について伝える。この建築物が、王子あるいは皇太子の住居を指しているのか、あるいはエテル・ピー・アダドの若死にした息子の廟所か、それとも他の目的に作られた別の何かの建築物か、それは分からない。

中期アッシリア時代のマリ王国における王達の継承順番を概観する表を以下に挙げる。

治世	王 <sup>57</sup>
前1243-1207	*トゥクルティ・ニヌルタ, アッシリア王 (不確定)
(年代不明)	アダド・ベール・ガベ, マリ国王
(年代不明)	*リーシュ・ネルガル, マリ国王 (不確定)
	アダド・ベール・ガベ一世 (仮), マリ国王 <sup>58</sup>
	*エテル・ピー・アダド, マリ国王
前1133年前後	*マス・ル・ヤウ, マリ国王 — エンリル・アブラ・ウツル
前1109年前後	*アダド・ベール・アブリ, マリ国王
	*アダド・ベール・ガベ二世 (仮), マリ国王
前1096年前後	*アッシュル・ケティ・レシエル, マリ国王
	[ ], マリ国王
	*A [ ], マリ国王

### タル・タバン／タベトゥ出土文字資料

1997年から1999年に実施されたタル・タバンの発掘調査において出土した計71の文字資料全てを以下に発表する。資料は、例外なく中期アッシリア時代の瓦礫層から発見されたものである。なお以下に用いる文書番号は、161-182頁に掲載する各楔形文字書写の番号、並びに Maul 2005 における文書番号 (Text Nr.) に対応する。

### 中期アッシリア時代の粘土板文書 (文書1)

タル・タバンの地表, 「トレンチ3」附近において粘土板文書の断片が発見された (発掘番号 T III-S-2)<sup>59</sup>。文書に使われている文字の形体から, 当該粘土板文書が中期アッシリア時代に作成されたものであることに疑いの余地はない。粘土板断片の大きさは, 縦最長 2,6 センチ, 横最長 2,4 センチであり, 厚さは最大 1,5 センチである。粘土板の元来の形態を復元することは不可能。

57 王名の前に付記された星印 (\*) は, 当該の王の碑文が発見されていることを意味している。王位は, 見た所例外なく父から子へと継承された。

58 文書60と文書61は, おそらくこの王の碑文ではないか, と考えられる。

59 同じ区域の地表において, 中期アッシリア時代に由来する文字資料がさらに3点発見されている。すなわち, 円筒の断片二点 (T III-S-3=文書8並びにT III-S-1=文書10), さらに煉瓦断片一点 (T III-S-4=文書37)。これら全てに, 名前の知られている王の中では最も後代のマリ国王アッシュル・ケティ・レシエルの碑文が残っている。

粘土板断片の保存状態は悪く、翻訳はもちろんのこと翻字を提示することも出来ない。しかし、残存している文字の痕跡は、中期アッシリア時代においてタベトゥにあった行政中枢部が経済活動を文書に記録していたことを証明する。タル・タバンから出土したこの粘土板に、タベトゥの王宮と密接な関係にあったに違いないマリ国地方行政に関する最初の証拠を見出すことが出来る。この中期アッシリアの粘土板断片は、その収支を几帳面に記録していた役人によって管理されていた穀物倉庫経営の存在を証言する。タル・タバンにおけるさらなる発掘調査において巨大な粘土板文書アーカイフが発見され、中期アッシリア時代におけるハブール川流域のアッシリア行政に関する我々の知識を一新することが期待される。

粘土板 T III-S-2 には、その名前が言及されたある人物<sup>60</sup>、さらに個々には言及されていない労働者達に配給された穀物の数量が記録されていたようだ。大半のケースにおいては、支給に際しての根拠も言及されていたことだろう。この断片 T III-S-2 が、倉庫管理の脈絡に由来する書簡の断片であった可能性も排除できない。

## マリ国王の碑文（文書 2-71）

中期アッシリア時代の王都タベトゥの遺跡において1997年から1999年の間に実施された考古学調査によって、タベトゥを居城にしていたマリ国王達の碑文が記された遺物が計70点発見された。王碑文の記された9つの土製円筒の断片10点（文書 2-10）と並んで、文字の記された煉瓦の断片46点（文書11-56）、同じく文字の記された壁装飾土製釘の断片13点（文書57-69）が見つかった。さらに、簡潔な王碑文が付記された土器の断片が1点発見されており（文書70）、この他、王の資産であることを示す注記と考えられる痕跡が残っている土器の断片も1点ある（文書71）。

### 1. 円筒碑文（文書 2-10）

タル・タバンの発掘において九つの土製円筒の断片10点（小さな断片を含む）が発見された。これらの円筒は、作成方法、形態、そして大きさの点ではほぼ共通している。また、隣接する遺跡であるタル・ブデリから出土したアッシュル・ケティ・レシエルの円筒碑文とも極めて類似している [Maul 1992: 14-15]<sup>61</sup>。タル・ブデリ出土の円筒と同様、文書の媒体は両端が若干細く窄まった筒型をしており、長さは20 cm ほどになるものと考えられる。両端部の直径は5,2 cm から6,6 cm ほどであり、最も太くなる円筒中央部における直径はその数値より若干大きくなる。タル・タバンにて見つかった円筒は全て当時の段階で焼成されており、中期アッシリア時代の焼成された粘土板に特徴的な黄みがかった象牙色をしている。タル・ブデリ出土のアッシュル・ケティ・レシエルの円筒と同様、0,8 cm から1,3 cm の太さをした木製棒、あるいは葦、の回りに分厚い粘土を覆い被せ、形を整えることによって、円筒はまず形作られた。まだ未加工の円筒部材の両端からはみ出していた棒は、軸受けに固定された可能性がある。それによって、棒を回しながら、表面を平滑にする何かの道具を用いることにより円筒の最終的な形状を容易に仕上げ、なおかつ、刻まれた直後の文字を潰すことも指紋を残すこともなく碑文を刻み込むことができたのだろう。円筒が焼成された後、木製棒あるいは葦があった所には、円形の断面をした横軸に走る穴が

60 表面第5行には、おそらくアダド・パール・[ ] という名の人物が言及されている。

61 ここで紹介する建築碑文の文体と字体は同時代の中期アッシリア王碑文のそれを指向したもののだが、マリ国王達によって選ばれた文字媒体「円筒」は、アッシリアではなくバビロニアの伝統に則っている (Maul 1992: 19-20 を参照)。

残った。そこには、大抵、棒あるいは葦の筋目の跡を見て取ることが出来る<sup>62</sup>。

マリ国王の碑文の記された土製円筒は全て横軸に沿った行に文字が記された。各行の間には、区分線が大抵引かれた。ただ、一つの円筒碑文（T III-8-1=文書3）のみ、行間に区分線が引かれていない。最も短い碑文（文書4）は19行、最も長い碑文（文書3）でも多く見積もって25行の文章から構成される<sup>63</sup>。また、時として、一行が円筒の角を超え右側面部にまで書かれることもある。最初と最後の行の間に開けられた比較的大きな空白部、そして最初の行の直前に水平に引かれた線のおかげで、どの箇所から碑文が始まるのか読み手は一目で見分けることができる<sup>64</sup>。碑文が作成された日付並びに碑文の内容の簡潔な要約と解すことが出来る<sup>2</sup><sup>65</sup>、<sup>3</sup><sup>66</sup>、あるいは4行<sup>67</sup>からなる奥書が記されているが、これも小さな空白部<sup>68</sup>かあるいは二重線<sup>69</sup>によって王碑文本文から明確に区分されている。また、奥書は、碑文本文とは異なり各行間に線が引かれないことによってもすぐ識別できる<sup>70</sup>。全ての円筒断片に残る碑文は、幾ばくかの変種があるものの、概して同一の明確で端正な楔形文字書体で記されている。この書体は、中期アッシリア帝国時代後期、すなわちアッシリア王ティグラトピレセル一世（前1114-1076年）治世の時期に特徴的なものである<sup>71</sup>。

タル・タバンの発掘において発見された円筒碑文の断片は、原位置から出土したものではなく、全て、テル北西部に位置する急勾配の斜面に生じた瓦礫層の中から見つかったものである<sup>72</sup>。円筒は、各円筒碑文において建築もしくは再建されたことが報告されている建築物の壁部にもともとはめ込まれていた。この建築物が根本的に破壊された際、円筒碑文は破壊され、瓦礫の中に打ち捨てられたと考えられる。

タル・タバンの地表からも円筒の断片2点が採集されている。内1点（T III-S-3=文書8）は、タル・ブデリ出土の碑文より知られるアッシル・ケティ・レシエル（前11世紀初頭）の碑文に帰属すると確証できる。この断片は、タベトゥの城壁と城門の修復を扱ったある同一の碑文を記した4点の謄本の一つである（文書5-8）。別の断片（T III-S-1=文書10）に関しては、あまりに小さいため、その碑文の内容について確かなことは何も言えない。もっとも、その外見が、アッシル・ケティ・レシエルの円筒に帰属する碑文断片に酷似していることから、同じくこの王の碑文に帰属する可能性が高い。あるいは、上述した断片T III-S-3=文書8を含むアッシル・ケティ・レシエルの同一の碑文の五つ目の謄本であるのかもしれない。この碑文に関しては、さらに、中期アッシリア時代の文化層に由来する瓦礫を含む瓦解（“Middle Assyrian drifted layer”<sup>73</sup>）の中からも謄本が三点見ついている（TI-23-1=文書5、TI-108,1とTI-108,2=文書7）。内2点は同一の円筒碑文謄本の断片である（文書7）。

62 以下の写真を参照。Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: Pl. 23, Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: Pl. 30 下, Ohnuma/ Numoto 2001: Pl. 25（特に鮮明）、Pl. 28, Pl. 30。

63 厳密な行数を突き止める事は出来ない。

64 これは、文書2、文書3、文書4、文書5、文書6、そして文書8に明瞭。

65 文書2、文書5、文書6。

66 文書4。

67 おそらく文書3。

68 文書2、文書4、文書5。

69 文書6。

70 例外は文書2と文書3。文書2の奥書は、その前後に開けられた空白部によって明確に区別されているものの、奥書の行間にも王碑文本文と同様に線が引かれている。文書3には、碑文本文第1行直前を除き、そもそも行間の線が引かれていない。

71 Weidner 1952/53: 201 並びに Maul 1992: 55-62 を参照。

72 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: Fig. 6 並びに Ohnuma/ Numoto 2001: 4, Fig. 3。

73 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 9-10 と Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6 を見よ。

同層からは、他にも明らかに古い文字資料が数多く見つまっている。すなわち、アッシュル・ケティ・レシエルの高祖父に当たるエテル・ピー・アダドの碑文が記された煉瓦 1 点<sup>74</sup>、漏斗型をした壁装飾土製釘の断片 2 点 — 内 1 点にはアダド・ベール・ガベという王名が称号と共に記されている —<sup>75</sup>、そして土器片 1 点である (T II-148-1=文書71)。第 6 層からは<sup>76</sup>、碑文の記された煉瓦の断片 1 点<sup>77</sup>、漏斗型をした土製釘 — 内 1 点には碑文が有り<sup>78</sup>、3 点には碑文がない — が見つまっているが、それらと並んでやはりアッシュル・ケティ・レシエル王のある碑文が記された円筒断片が 1 点発見されている (文書 4)。この碑文では、ある重要な建築物を修復し拡張したという報告がなされている。あるいは、この建築物とはタベトゥ市の聖所、すなわち天候神アダドの神殿のことなのかもしれない。第 8a 層からは<sup>79</sup>、発掘溝 T II において更なる円筒断片 2 点が発見されている。内 1 点 (T II-25-1=文書 6) は、上述の表採された断片と同様、タベトゥの城壁と城門の修理に際して作成されたアッシュル・ケティ・レシエルの碑文に帰属する。もう一つの断片 (T II-28-1=文書 9) に関しては、第 6 層から出土した円筒断片と同様、アダド神殿の修復工事を扱ったアッシュル・ケティ・レシエルの碑文断片に帰属する可能性もある。第 8a 層からは、他、碑文の刻まれた煉瓦の断片 4 点が見つまっている。内少なくとも 2 点には、アッシュル・ケティ・レシエルの高祖父エテル・ピー・アダドの資産である事を示す注記が記されている<sup>80</sup>。他二点は保存状態が劣悪であり、どの王に由来するのか突き止めることが出来ない。第 8b 層からは<sup>81</sup>、これまで見つかったタベトゥに由来する円筒碑文の内でも最も古い碑文が発見されている。円筒断片 T III-2-1 (文書 2) には、アッシュル・ケティ・レシエルの祖父アダド・ベール・アプリの建築碑文の一部が残っており<sup>82</sup>、タベトゥにおけるグラ神殿エガルマフの一部、あるいはその境内の根本的な改修工事がこの王によって施行されたことが報告されている。第 8b 層にて発見された二つ目の円筒断片 (T III-8-1=文書 3) には、アッシュル・ケティ・レシエルの父アダド・ベール・ガベの建築碑文が記されている。この碑文では、ある男神、おそらく天候神アダド、に献堂されたタベトゥの神殿の改修工事が取り扱われている。同じ層位からは、さらに碑文入り煉瓦の断片 8 点が出土している<sup>83</sup>。内 5 点には、アダド・ベール・ガベという名の王の息子であり、また、層位から判断するにアッシュル・ケティ・レシエル治世以前に在位していたに違いないリーシュ・ネルガルの碑文の一部が残っている<sup>84</sup>。第 8b 層からは、他にも以下のような文字資料が見つまっている。皿形土器の断片が 1 点<sup>85</sup>。壁装飾土製釘の断片が 4 点<sup>86</sup>。土製釘の断片の内 1 点には、アッシュル・ケティ・レシエルの高祖父エテル・ピー・アダドの名前が言及されている<sup>87</sup>。別の 1 点には、アダド・ベール・ガベという名の王の碑文が刻まれているが<sup>88</sup>、これが

74 T II-146-1 (=文書14)。

75 T II-105-1 (=文書61) と T II-117-1 (文書64)。

76 Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6 と Ohnuma/ Numoto 2001: 3 を参照。

77 T III-27-1 (=文書42由来不明)。

78 T II-11-1 (=文書62)。

79 Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6 並びに Ohnuma/ Numoto 2001: 3 を参照。

80 T II-23-1 (=文書15) と T III-38-10 (=文書17)。

81 Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6 並びに Ohnuma/ Numoto 2001: 3 を参照。

82 タル・ブデリにおいてもアダド・ベール・アプリの碑文が記された煉瓦が一点知られている (Maul 1992: 45, 77 並びに Tafel 8, Ziegel 7 を見よ)。

83 文書23, 文書24, 文書27, 文書35, 文書36, 文書41, 文書44, 文書46を見よ。

84 文書23, 文書24, 文書27, 文書35, 文書36。

85 T III-7-1 (=文書70)。

86 文書57, 文書60, 文書65, 文書69。

87 T III-47-1 (=文書57)。

88 T III-66-1 (=文書60)。



何れのアダド・ベール・ガベに相当するのか、古い時代のか、新しい時代のか、あるいは同じ名前をした更なる別の王なのか、判断することは出来ない。第9a層からは、中期アッシリア時代の碑文付き煉瓦の断片多数と碑文付き壁装飾土製釘の断片3点が見つかった。しかしながら、文字資料が発見されているタル・タバンの層位の内では最も古いこの層位から円筒碑文の残部は発見されなかった。

タル・タバンにて見つかった円筒碑文の断片10点は全てあるマリ国王の名の下に作成された建築碑文に属する。これまでに継続して位に即いた三人の王達の碑文が発見されている。最も古いものは、アダド・ベール・アプリに由来し、前1109年に書き記された（T III-2-1=文書2）。この碑文では、「タバトゥ」と表記されているタベトゥにおけるグラ神殿エガルマフの一部、あるいは境内の根本的な改修工事が言及されている。神殿の改修工事は、アダド・ベール・アプリの息子に当たるアダド・ベール・ガベ二世（仮）の碑文の主題でもある。この碑文（T III-8-1=文書3）は、前12世紀末期に作成されたと考えて良からう。他の円筒碑文は全てアダド・ベール・アプリの孫のアッシュル・ケティ・レシエルに由来する（文書4-10）<sup>89</sup>。これらの碑文においては、神殿の改修工事（T II-14-1=文書4, T-28-1=文書9）、そしてタベトゥにおける防御施設の再建（文書5-8）が主題化されている。

マリ王の円筒碑文には、中期アッシリア時代の王碑文の重要な要素が全て含まれている。すなわち、アッシュル・ケティ・レシエルの碑文は、本文の始めに王の資産である事を示す注記が記されている<sup>90</sup>。もっとも、これは、タル・タバン出土のより古い時代の王碑文には欠落している。全ての円筒碑文には、実質的な建築工事に関する報告の前に、まず、*enūma*「... した頃」に始まる時勢文の文体で歴史的背景を語る簡潔な導入部が記されている<sup>91</sup>。これに続き、建築主たる王の名前、称号、家系<sup>92</sup>、そして実質的な建築工事の報告が言及される<sup>93</sup>。建築工事の報告は、建築物<sup>94</sup>と建築主<sup>95</sup>の祝福で幕を閉じる。王碑文の末尾を飾るのは「後の領主達への呼びかけ」であり<sup>96</sup>、それに祝福<sup>97</sup>と呪い<sup>98</sup>の言葉が続く。

マリの王達の円筒碑文には、数行からなる奥書が付記されている<sup>99</sup>。そこに、文書の作成年代、建築主たる王の名前、碑文が作成される契機となった建築計画が言及される。

## 文書2 アダド・ベール・アプリの碑文が記された土製円筒断片（写真：141頁 Fig.1-2）

内容：前1109年に作成されたアダド・ベール・アプリの建築碑文の断片。当該碑文においては「タバトゥ」と表記されているタベトゥ市におけるグラ神殿エガルマフの一部もしくは境内の根本的な改修工事について報告する。

89 文書9と文書10に関しては、この碑文に帰属する可能性は高いもの、確実ではない。

90 文書4、第1行、文書5-8、第1行。文書9には残っていない。

91 文書2、第1-2行、文書3、第1-2行、文書4、第2-4行、文書5-8、第2-4行。

92 文書2、第3行（四世代からなる家系）、文書3、第2-4行（治世年代に関する付記が追加）、文書4、第4行（家系の記述なし）、文書5-8、第5行。

93 文書2、第4行、文書3、第4-5行、文書4、第4-6行、文書5-8、第6-9行、文書9、第3'-4'行。

94 文書2、第4-5行、文書3、第5-6行、文書4、第6-7行、文書5-8、第10-14行。文書9には欠如（?）。

95 文書2、第5-6行（?）。文書3、第8行を参照。文書4、第7-10行。文書5-8には欠如。文書9、第4'-5'行。

96 文書2には残っていない。文書3、第6-9行、文書4、第11-13行。文書5-8、第15-17行、文書9、第5'-8'行。

97 文書2には残っていない。文書3、第9行、文書4、第13-14行、文書5-8、第17-18行、文書9、第9'-10'行。

98 文書2と文書3には残っていない。文書4、第15-16行、文書5-8、第19-20行、文書9、第10'-12'行。

99 文書2、第1'-2'行、文書3、第0'-1'行、文書4、第17-19行、文書5-8、第21-22行、文書9、第13'行。

翻訳<sup>100</sup>：

- 1-2 [アッシリア王、我が主、ティグラトピレセル（一世）の御代に（？）....] [我が父祖である前任の王達が  
建立し] た、タバトゥ市における [エ・ガル]・マフ、畏敬の念を抱かせる御堂、[の....] が、荒れ果てて  
しまった [頃]、
- 3 マ [リ] 国王アダド・ベール・ガベの息子であったマリ国王 [エテル・ピ] ー・アダド [の息子であったマ  
リ国王マヌ・ル・ヤーウの息子であるマリ国王、（我、） アダド・ベール・アプリ] は、
- 4 [その荒れ果てた姿を目にし、この社殿（？）を新築した（？）（....）そ] の [礎] をエアと黄泉の神々が  
[慈しむ] ように。
- 5 [その壁冠をシンとシャマシュが庇護す] る [ように]。偉大なる女主グラが [....] 頃、
- 6 [ ..... ] .... [ ..... ]  
(以後欠損。最大で12行に及ぶ欠落部が続く)

1' [某月某日紀年職イナ・イリ] ヤ・アラク（の年）[に。] マリ国王アダド・ベール・アプリが

2' [(社殿) エ・ガル・マフの（？）.... の礎を] 築いた。

### 文書3 アダド・ベール・ガベ二世（仮）の碑文が記された土製円筒断片（写真：142頁 Fig.3）

内容：アダド・ベール・ガベ二世（仮）がおそらく前12世紀末頃に作成させた建築碑文の断片。タベトゥにおけ  
るある神殿の根本的な改修工事について報告する。この神殿は、ある男神、おそらく天候神アダドに献堂された。

翻訳：

- 1-2 [我が父祖である前任の王達が建立し] た、我が主であるタベトゥ市の [神某の社殿某] が、荒れ果ててし  
まった [頃]、
- 3 [アッシリア王、我が主、ティグラトピレセル（一世）（？）] の御代に、[マリ国王] マヌ・ル・ヤーウの息  
子であったマリ国王 [アダド・ベール・アプ] リの [息子であるマリ国王、（我、） アダド・ベール・ガベが]
- 4 [その荒れ果てた姿を目にし、この社殿を（／の.... を）新築] した。我が父の [....] の為、
- 5 [ ..... ]。その [礎] をアヌと黄泉の神々が
- 6 [慈しむように。（....）その壁冠、（....）をシンとシャマ] シュが庇護するように。
- 7 [将来、無数の年と日（が過ぎ去った後）（？）、] マリの神社境内において
- 8 [神某の社殿が荒れ果て、老朽し、その壁が崩れ落ちた（？）] 時には、（王座に）即く [将来の領主] が（？）、
- 9 [その朽ち果てた姿を目にし、（これを）新築するように。そうすれば、神某はタベトゥ市に（／マリの神社  
境内に）] 住み（続ける）であろう。
- 10 [ ..... ]...  
(以後欠損。最大で11行に及ぶ欠落部が続く)

100 疑問符（？）を付与した一節は、文書全体をより良く理解するため欠損部に補ったものであり、必ずしも確実ではない。

- 0' [アッシリア王我が主ティグラトピレセル（一世）の御代，某月某日紀年職某（の年）に]
- 1' マリ国王 [マヌ・ル]・ヤーウの [息子であったマリ国王アダド・ベール・アプリの息子であるマリ国王アダド・ベール・ガベ] が
- 2' 勇士たる [タベトゥ市の神某（／神）の社殿某の礎を（？）]<sup>101</sup>
- 3' [定め] た。

文書4 アッシル・ケティ・レシエルの碑文が記された土製円筒断片（写真：142-143頁 Fig.4-5）

内容：アッシル・ケティ・レシエル（ここではアッシル・ケタ・レシエルと表記されている）が前11世紀初頭に作成させた建築碑文の断片。タベトゥにおけるある建築物を根本的に改修し，拡張した工事について報告する。ここで言及されている建築物とは，タベトゥにあった神殿のことであろう。あるいは天候神アダドを祀った主神殿かもしれない。

翻訳：

- 1 マリ国王アダド・ベール・アプリの息子であったマリ [国王アダド・ベール・ガベの息子であるマリ国王アッシル・ケタ・レシエルの王宮（の資産）。]
- 2 [昔，我が父祖である前任の王達が....（＝建築物，社殿？）を建立したが，それは（やがて）荒れ果て（？）]，マリ国王 [アダド・ベール・アプ] リが
- 3 [(....) その荒れ果てた姿を目にし（？），(....)]（これを）（再）建したものの，
- 4 [(再び) 荒れ果ててしまった（？）] 頃，マリ国王，（我，）[アッシル・ケタ]・レシエルは，その荒れ果てた姿を
- 5 [目にした。自ら熟慮した末（？）]，[....] を [拡] 張した。三十（？）層の煉瓦を積み上げた。
- 6 [（建築報告の続き） そ] の [礎] をエアと黄泉の神々が慈しむように。
- 7 [その壁冠をシンとシャマシュが庇護するように。(....) アダド，（そして）] マルドゥク，シン，シャマシュ，
- 8-9 [タベトゥ市の偉大なる神々（？）が.... 時<sup>102</sup>，彼らは] [マリ国王アダド・ベール・アプリの息子であったマリ国王アダド・ベール・ガベの息子である] マリ国王 [アッシル]・ケタ・レシエルを [.... ように<sup>103</sup>。]
- タベトゥ市 [に住] む [神々某，....（神名と称号），我が主（？），が]
- 10 [我を.... するように。長寿（？）を] 我が享受する（lit. 満ち足りる）ように。
- 11 [将来，無数の年と日（が過ぎ去った後）（？）....（＝建築物，社殿？）が荒れ果て]，老朽し，
- 12 [その壁が崩れ落ちた時には（？），（王座に）即] く [将来の領主] が，その朽ち果てた姿を目にし，（これを）新築するように。
- 13 [彼は，（ここに）記された我が名（i.e. 碑文）を彼の名（i.e. 碑文）とともにその（元にあった）場所に戻すように。]（ここに）記された我が名をその名とともにその（元にあった）場所に戻す [者] については，
- 14 [その祈りを我が主たる偉大なる神々（？）が（確かに）聞き] 届けるであろう。

101 もしくは「タベトゥ市の神某（／神）の社殿，社殿某を」など。

102 欠損部中「....」と記した箇所には，「彼らの社殿に嬉々として入る」などといった文句を補える可能性がある。

103 欠損部中「....」と記した箇所には，「好意の目で見つめる」などといった文句を補える可能性がある。

- 15 [(ここに) 記された我が名を取り除き, 我が名の (記された) 碑文を破壊する (?) 者は, 二度と光を見る事がないように (?). その種と] その子孫を
- 16 [アダド, シン, シヤマシュ, そしてマルドゥク, 天と地の偉大なる神々がマリ国から] 滅ぼし去るように。  
(空白部)
- 17 [その主であるアッシリア王ティグラトピレセル (一世) の御代, 某月] 28 [日], 紀年職
- 18 [某 (の年) にマリ国王アッシュル・ケタ・レシエルがタ] ベトゥ市の [神某の社殿 (の基礎) (?) を定め] た<sup>104</sup>。

#### 文書 5-8 アッシュル・ケティ・レシエルの円筒碑文 (写真: 143-145頁 Fig.6-10)

内容: 前11世紀初頭に作成されたアッシュル・ケティ・レシエルのこの建築碑文は, 4点の謄本をもとに大概を再構成できる。この4点は, 同一の王碑文を写した4点の異なる謄本に帰属する。この碑文は, タベトゥにおける城壁と城門の根本的な改築工事を報告する。

翻訳:

- 1 [マリ国王アダド・ベール・アプリの息子であったマリ国王] アダド・ベール・[ガベ] の息子であるマリ国王 [アッ] シュル・ケティ・レシエルの王 [宮] (の資産)。
- 2 我が祖父である [前任の] 王達 [の御代, (タベトゥの) 城壁と城門が荒れ果てた頃]
- 3 [ ]..... [ ]
- 4 [彼は, 城壁と城門を建] て, [その] 門には扉を [備え付けた (が, ) ]
- 5 [その頃, ] [マリ国王アダド・ベール・アプリの息子であったマリ国王] アダド・ベール・ガ [ベ] の息子であるマリ国王, [(我,) アッシュル・ケティ]・レシエルは,
- 6 [その荒れ果てた姿を目にし], 自ら熟 [慮した末, ]
- 7 [ ]..... [ ]
- 8 [ ]
- 9 [我は, ] (城壁を) 以 [前の] ものよりさらに [立派にした (?). その礎からその壁冠に至まで我は建築し, (城壁を) 完成させた (?).]
- 10 アダド, そしてマル [ドゥク, シン, (そして) シヤマシュ, タベトゥ市の (?) 偉大なる神々が ]
- 11 将 [来, ]
- 12 [ ]... ヌスカと [神某が, ]
- 13 我 [が都市] タベトゥ [において (／のために／の)], ... [ ] のために [ ]
- 14 [城] 門と土塁 (?) が末 [々 ]
- 15 (この) 城壁とこ [の] 城門が荒れ果 [て, 老朽した] 時には
- 16 (王座に) 即く将来の領主が, [その] 荒れ果てた [姿を目] にし, (これを) 新築 [する] ように。
- 17 彼は, (ここに) 記された我が名 (i.e. 碑文) を彼の名 (i.e. 碑文) とともにその (元にあった) 場所に戻すよ

104 もしくは「[タ] ベトゥ市の [神某の社殿を定め] た」など。



- うに。（ここに）記された我が名をその名とともに〔その〕（元にあった）場所に〔戻す〕者については、
- 18 その祈りをタベトゥ市の偉大なる神々が確かに聞き〔届けるであろう。〕
- 19 （ここに）記された我が名を取り除き、我が〔名の代〕わりにその名を記す者は、シン、そして〔シャマシュ、アダド、（そして）マルドゥク〕、
- 20 天と地の〔偉大なる神々が〕その種とその子孫をマリ国から〔滅ぼし去るように。〕
- 21 アラフサムナ月（第8月）20日紀年職ムダメク・〔パール（の年）〕に、〔アッシュル・ケティ・レシエル、マリ国王は、〕
- 22 （この）城壁とこの城門を堅固〔にした。〕

### 文書9 あるマリ国王の碑文が記された土製円筒断片（写真：146頁 Fig.11-12）

内容：おそらくアッシュル・ケティ・レシエルに由来すると推測される建築碑文の残部。タベトゥにおけるアダド神殿の再建並びに改築工事が取り扱われている。

#### 翻訳

- 1' [ ]...
- 2' [ ]...
- 3' [ ] 我は建〕築した。〔我が主（？）〕ア〔ダド〕の社殿については、
- 4' 〔（その施設と調度品を）我は以前のものよりもさらに立派にした（？）。アッシュル・ケティ・レシエル（？），マリ国王，...〕その〔主〕の〔...〕，その主の社殿を建立した者，
- 5' [（祝福の祈願）]
- 6' [将来，無数の年と日（が過ぎ去った後）（？），...] この社殿の〔...〕が老朽し，
- 7' [その壁が崩れ落ちた] 時には，〔（王座に）即〕く〔将来の領主〕が，その朽ち果てた姿を目にし，
- 8' 〔（これを）新築するように。彼は，（ここに）記された我が名（i.e. 碑文）を彼の名（i.e. 碑文）とともに〕その（元にあった）〔場〕所に戻すように。
- 9' 〔（ここに）記された我が名をその名とともにその（元にあった）場所に戻す者については〕，我が主である偉大なる〔神〕々が
- 10' 〔その祈りを確かに聞き届けるであろう。（ここに）記された我が名〕を取り除き，
- 11' 〔我が名の（記された）〕碑文を〔破壊する（？）者は，二度と光を見〕る事がないように（？）。〔その〕種と
- 12' 〔その子孫をアダド，シン，シャマシュ，そしてマルドゥク，天と地の偉大なる神々が〕マリ国から滅ぼし去るように。
- 13' [（日付）]

## 文書10 あるマリ国王の碑文が記された土製円筒断片（写真：147頁 Fig.13）

内容：おそらくアッシュル・ケティ・レシュルに由来すると推測される建築碑文の極めて小さな残部。状態があまりに劣悪であり、翻訳は不可能。

## 2. 煉瓦碑文（文書11-56）

タル・タバンの発掘において、碑文の刻まれた煉瓦断片46点が発見された。煉瓦は、粗い切りわらを混入した泥土によって作成された後、決して高くはない温度で焼成された。原位置より出土した碑文付きの煉瓦はない。碑文付き煉瓦の断片8点から、二種類の異なるエテル・ピー・アダドの碑文が再構成される（文書11-18）。彼の息子であり後継者であったマヌ・ル・ヤーウに関しても、一つの煉瓦碑文が知られているが、この碑文のサンプルについては、煉瓦の断片一点のみが見つかった（文書19）。これに対し、アダド・ベール・ガベを名乗る王の息子であったリーシュ・ネルガルのある碑文については、合計17点にのぼる碑文付き煉瓦の断片が知られている（文書20-36）<sup>105</sup>。他にも、20点の碑文付き煉瓦断片が見つかったが、これらは保存状態が余りにも劣悪であるため、碑文に言及されている王の名前を突き止める事が出来ない（文書37-56）。

### 2.1. エテル・ピー・アダドの煉瓦碑文（文書11-18）（写真：147-148頁 Fig.14-15）

エテル・ピー・アダドに関しては、これまで二種類の異なる煉瓦碑文が確認されている。

第一のタイプの碑文は、合計7点を数える主として小さく保存状態も悪い碑文付き煉瓦断片から再構成される（文書11-17）。この中に、原位置から出土した物はない。煉瓦は各辺33cmの正方形をしており、厚さは6,0cmから6,5cmである。碑文は、エテル・ピー・アダドがその息子エンリル・アブラ・ウツルのために建てさせた建築物に用いるため当該の煉瓦が作成されたことを伝える。この建物が、王子あるいは皇太子の住居を指しているのか、あるいはエテル・ピー・アダドの若死にした息子のために建てられた廟所、もしくは全く別の目的の建築物を指しているのかは分からない。奇妙な事に、当該のエテル・ピー・アダドの碑文には、このマリ国王の家系が言及されていない。二行書きで記されたこの碑文の文面は以下の通り。「マリ国王エテル・ピー・アダドが／（この建物を）その息子エンリル・アブラ・ウツルのために建立させた」。表採されたある漏斗型をした壁装飾土製釘（文書66）にも同様の碑文が刻まれている。上述煉瓦碑文（文書11-17）が言及している建築物にこの碑文も由来している事に疑いはあるまい。

第二のタイプの煉瓦碑文に関しては、目下の所唯一つのサンプルのみが知られている（文書18）<sup>106</sup>。上述した第一タイプの碑文とは異なり、この碑文にはエテル・ピー・アダドの父親の名前が言及されている<sup>107</sup>。二行書きで記されたこの碑文の文面は以下の通り。「マリ国王 [アダド・ベール・ガ] への [息子], / [マリ国] 王 [エテル]・ピー・アダドの [王宮]。』この碑文は、エテル・ピー・アダドがその居城タベトゥに王宮を建築したか、あるいはその前任者の王宮を改修した可能性を示唆する。エテル・ピー・アダドの王宮について言及するこの煉瓦が、厳密には王宮の一部とは言えない公的建築施設の建造に使用された可能性ももちろん排除できない。

<sup>105</sup> ただし内7点（文書30-36）に関しては、この同定はまだ不確実。

<sup>106</sup> 無論、保存状態が極めて劣悪な煉瓦断片、文書30-36並びに文書46、が当該碑文の謄本である可能性も捨てきれない。

<sup>107</sup> 当該王の父親は文書2、第3行にも言及されている。

## 2.2. マヌ・ル・ヤーウの煉瓦碑文（文書19）

マヌ・ル・ヤーウの煉瓦碑文に関しては、これまで唯一点のみサンプルが確認されている。この碑文付き煉瓦も原位置より発見された物ではない。二行書きで記されたこの碑文の文面は以下の通り。「マリ国 [王] [エテル・ピー・アダドの息子] / マリ国王 [マヌ・ル]・ヤーウの [王宮]」<sup>108</sup>。この碑文は、マヌ・ル・ヤーウがその居城タベトゥに王宮を建築したか、あるいはその前任者の王宮を改修した可能性を示唆する。マヌ・ル・ヤーウの王宮について言及するこの煉瓦が、厳密には王宮の一部とは言えない公的建築施設の建造に使用された可能性ももちろん排除できない。

マヌ・ル・ヤーウの簡潔な建築碑文は、他にも、漏斗型をした壁装飾土製釘に刻まれた物が残っている（文書58）。

## 2.3. リーシュ・ネルガルの煉瓦碑文（文書20-36）（写真：147-148頁 Fig.14-15）

アダド・ベール・ガベの息子、リーシュ・ネルガルに関しては、一つの碑文しか知られていない。この碑文は、煉瓦断片10点に残存している（文書20-29）。さらに極めて小さな煉瓦断片7点にも、同じ碑文が刻まれているようだ（文書30-36）<sup>109</sup>。リーシュ・ネルガルという名の王がマリ国を支配していたという我々の知識は、二行書きに記されたこの碑文にのみ基づいている<sup>110</sup>。文面は以下の通り。「マリ国王アダド・ベール・ガベの息子、/ マリ国王リーシュ・ネルガルの王宮」。この碑文は、リーシュ・ネルガルがその居城タベトゥに王宮を建築したか、あるいはその前任者の王宮を改修した可能性を示唆する。リーシュ・ネルガルの王宮について言及するこの煉瓦が、厳密には王宮の一部とは言えない公的建築施設の建造に使用された可能性ももちろん排除できない。正方形をしたこの煉瓦の各辺は33 cm であり、厚さは5,6 cm から6,5 cm である。

## 2.4. 由来不明の煉瓦碑文

何れの王に由来するのか厳密には分からない碑文が残っている煉瓦断片20点のうち、唯6点のみが、それぞれの煉瓦の由来する建築主たる王をある程度推測できる保存状態にある。断片2点（文書37と文書38）には、既に知られているアッシュル・ケティ・レシエルの碑文が記されているようだ。文面は以下の通り。「[マリ国王アダド・ベール・アプリの息子であった] / [王アダド・ベール・ガベの息子である] / [王] [アッシュル・ケティ]・レシエルの [王宮]」<sup>111</sup>。

別な断片3点（文書39, 文書40, 文書50）には、アッシュル・ケティ・レシエルの孫に相当するマリ国王の碑文の一部が残っている可能性がある<sup>112</sup>。この王の名前はまだ不明だが、前11世紀に在位していた事に相違ない。碑文の文面は以下の通り。「マリ国王アッシュル・[ケティ・レシエル] の / [息子であったマリ国王某の息子である] [(マリ国)] / 王 [アッシュル (?)・.... の王宮]」。

108 保存状態が極めて劣悪な漏斗型壁装飾土製釘（文書59）が当該碑文の平行本である可能性もある。

109 無論、文書30-36がエテル・ピー・アダドの碑文の残存部である可能性も排除できない。

110 一行書きに記された碑文も文書26に確認する事が出来る。

111 Maul 1992 : 42-44, Ziegel 1-3 を参照。

112 Maul 1999 : 52-53 を参照。文書40より、この王がAという文字から始まる名前をしていた事が明らかになっている。これは、当該王名がアッシュル (A-šur) という神名要素を伴っている事を示唆する。煉瓦の断片3点（文書39, 文書40, 文書50）は、マリ国の王国がアッシュル・ケティ・レシエルの後にも引き続き存在していた事を示す唯一の（ただし確実とは言えない）論拠。

さらに別の煉瓦断片（文書46）は、エテル・ピー・アダドの碑文の残部である可能性がある。無論、断片に残る数少ない文字の跡は、この断片があるアダド・ベール・ガベを名乗る王の碑文の一部とする解釈も排除しない。

### 3. 王碑文付き壁装飾土製釘（文書57-69）

タル・タバンの北西傾斜面に位置する瓦礫層からは<sup>113</sup>、煉瓦並びに円筒碑文の断片と並んで、碑文の記された壁装飾土製釘の断片<sup>114</sup>、さらに、碑文は記されていないものの同様の壁装飾土製釘頭部の平面な断片が見つまっている<sup>115</sup>。これらの土製釘が取り付けられていた場所に関して、出土状況からは何も分らない。

遺跡地表においても、碑文の記された壁装飾土製釘断片3点が採集されている<sup>116</sup>。中期アッシリアの文化層の瓦礫を含む瓦解（“Middle Assyrian drifted layer”）からは<sup>117</sup>、2点見つまっている<sup>118</sup>。第6層からは、碑文の記された壁装飾土製釘の断片1点<sup>119</sup>、碑文のない断片3点が発見されている。他の壁装飾土製釘の断片は、全て、第8b層<sup>120</sup>と第9a/8b層<sup>121</sup>に由来する。

碑文の記された断片の内、11点は、漏斗を思い起こさせる形をしたこれまで知られていないタイプの壁装飾土製釘に帰属する。このタイプに属するタベトゥ／タル・タバン出土の壁装飾土製釘はロクロの上で回しながら作成された後、高温で焼成された<sup>122</sup>。張り出した平板な漏斗型の深皿が柄の上に乗せられているわけだが、柄は筒型をしており、元々長さ40cmから50cmはあったに違いない。下に行くに従って細くなり、先端部は尖っていたと考えられる<sup>123</sup>。内部が空洞になっているこの筒の直径は、漏斗型の深皿が付けられている所で、7cmから8cmになる。発見されているサンプルの漏斗型深皿は、直径16,0cmから19,5cmになる。漏斗型深皿の内面には、一行書きで円を描くように楔形文字碑文が刻まれている。多くのサンプルにおいて、碑文は柄の付け根部分のすぐ近くに記されているが<sup>124</sup>、幾つかのサンプルにおいては、漏斗型深皿中部<sup>125</sup>、あるいは縁近くに記されている<sup>126</sup>。円を描くように記された碑文一行の直径は、5,9cm<sup>127</sup>から14,6cm<sup>128</sup>になる。碑文を構成する文字の底部は、外側を向いている事もあれば<sup>129</sup>、内側を向いている事もある<sup>130</sup>。楔形文字の大きさは、基本的に縦0,7cm程度になる。ただ例外的に文字が幾ばくか小さい<sup>131</sup>、あるいは大きいこともある<sup>132</sup>。

113 Ohnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6を参照。

114 古代オリエントに於ける壁装飾土製釘に関してはHemker 1993を参照。

115 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 15とPl. 21を参照。

116 文書63, 文書66（エテル・ピー・アダド）、文書67。

117 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 9-10とOhnuma/ Numoto/ Shimbo 2000: 6を参照。

118 文書61（アダド・ベール・ガベ）と文書64。

119 文書62。

120 文書57（エテル・ピー・アダド）、文書60（アダド・ベール・ガベ）、文書65、文書69。

121 文書58（マヌ・ル・ヤウ）、文書59（マヌ・ル・ヤウ、あるいはその息子アダド・ベール・アプリ）、文書68。

122 使用された粘土は、上質の砂に極めて微細な切りわら（1-4mm）が混入されたもの。

123 先端部が残っているサンプルはない。

124 文書57, 文書59, 文書60。

125 文書58, 文書61, 文書63, 文書64, 文書65。

126 文書62, 文書66, 文書67。

127 文書60。

128 文書62。

129 文書57, 文書59, 文書60, 文書62, 文書64, 文書66。

130 文書58, 文書61, 文書63, 文書65, 文書67。

131 0,4cmから0,6cmの間。

132 0,8cmから0,9cmの間。



タベトゥ／タル・タバンにて見つかったような漏斗型をした壁装飾土製釘は、我々の知る限り、アッシリア帝国の首都アッシュルにおいては用いられなかった。しかし、碑文は記されていないものの、類似したより小型の遺物が、エマル／メスケネにおいて知られている。これらは、いわゆる神殿「M」の入り口付近において発見されており<sup>133</sup>、J. マルゲロン（Margueron）によれば神殿建築外側正面部の装飾として使われていた。

タベトゥ／タル・タバンにて発見された他の断片2点は、壁装飾土製釘の別なタイプに帰属するが、このタイプはアッシュルにおいてもよく知られている<sup>134</sup>。これは、ドアの把手握り部分のような形をしている。その外見は、アッシュルの発掘者ワルター・アンドレの言葉を借りると「首が長く、球形の腹部をした瓶」のようにも見える<sup>135</sup>。「瓶」の「底部」（実際には土製釘の頭部）に穴が開けられ、その穴の回りに円を描くように碑文が一行書きで記されている。このタイプの壁装飾土製釘も、ロクロの上で回しながら作成され、高温で焼成された。

より保存状態の良いサンプルにおける穴の開けられた「瓶腹部」（すなわち、土製釘頭部）は<sup>136</sup>、直径 15,6 cm であり、高さ 4,2 cm である。その中心部に開けられた穴は、直径 4,0 cm である。もう一つのサンプルは、これよりも幾ばくか大きい。

第三のタイプの壁装飾土製釘は、碑文の記されていないサンプル1点のみが知られている<sup>137</sup>。これは、中期アッシリア文化層の瓦礫を含む瓦解（“Middle Assyrian drifted layer”）から見つかった遺物である。土製釘頭部は、平面で円形をしており、最大 2,0 cm にもなる厚みを持っている。この頭部が、筒型をした軸の上に乗っている。軸は、下に行くにつれて細くなり、その先端部は尖っていたと考えられる。土製釘頭部の直径は、9,0 cm である。太い軸の方は、長さ 2,0 cm しか残っていない。軸の長さは、元々 18 cm ほどもあったのではないかと考えられる。この土製釘も高温で焼成されている。

これら土製釘に記された碑文に話を移そう。まずアダド・パール・ガベを名乗るマリ国王の碑文が付記された漏斗型壁装飾土製釘が2点知られている<sup>138</sup>。他、2点にエテル・ピー・アダドの碑文<sup>139</sup>、1点にマヌ・ル・ヤーウの碑文<sup>140</sup>がそれぞれ記されている。同じくマヌ・ル・ヤーウ、あるいはその息子アダド・パール・アプリに由来する土製釘も1点知られている<sup>141</sup>。残りの土製釘碑文は破損がひどく、どのマリ国王に帰属するのか断定する事が出来ない。

土製釘碑文8点は、ある建築物を改修した（「新しくした」）際に作成された<sup>142</sup>。天候神アダドの神殿の改築工事は、アダド・パール・ガベ二世（仮）の円筒碑文1点<sup>143</sup>とアッシュル・ケティ・レシエルの円筒碑文2点<sup>144</sup>に

133 Margueron 1982: 32-33 並びに同 Abb. 9 を見よ。

134 文書68と文書69。

135 Andrae 1977: 208。同210並びに同210, Abb. 187 も参照。

136 文書69。

137 Ohnuma/ Numoto/ Okada 1999: 15 並びに Pl. 21 を参照。

138 文書60, 文書61。

139 文書57, 文書66。

140 文書58。

141 文書59。

142 文書57, 文書58, 文書60, 文書63, 文書64, 文書65, 文書68, 文書69。

143 文書3。

144 文書4, 文書9。

において言及されていると考えられるわけだが、さらに、土製釘碑文2点のテーマでもある<sup>145</sup>。同じくアダド神殿のことではないかと考えられるある神殿をマヌ・ル・ヤーウが新築したという記述が、土製釘碑文1点に見出す事が出来る<sup>146</sup>。壁装飾土製釘碑文2点においては、改修された建築物の名称が言及されていない<sup>147</sup>。別な碑文3点には建築物の名称が残っていない<sup>148</sup>。土製釘碑文2点には、宮殿を言及することによって王の資産である事を示す注記が付記されている<sup>149</sup>。ある土製釘に記されているエテル・ピー・アダドの碑文は<sup>150</sup>、煉瓦碑文にも見つける事が出来る<sup>151</sup>。この碑文の文面は次の通り。「[マリ国王エテル・ピー・アダドが（この建物を）] [その息子] エンリル・[アブラ・ウツルのために建立させた。]」当該の建物が、王子もしくは皇太子の住居を指しているのか、あるいはエテル・ピー・アダドの若死にした息子のために建てられた廟所、もしくは全く別の目的の建築物を指しているのかは分からない。

文書57：エテル・ピー・アダドの漏斗型土製釘

翻訳：[マリ国] 王エテル・ピー・アダドが（この建物を）新しくした。

文書58：マヌ・ル・ヤーウの漏斗型土製釘（写真：149-150頁 Fig.18-19）

翻訳：[(タベトゥ市の) 神某の] 社殿をマリ国王 [マヌ・ル]・ヤーウが新しくした。

文書59：マヌ・ル・ヤーウもしくはその息子アダド・ベール・アプリの漏斗型土製釘

翻訳：[神某の社殿を、マリ国王マヌ・ル・] ヤーウの [息子、マリ国王アダド・ベール・アプリが新しくした。]

文書60：アダド・ベール・ガベの漏斗型土製釘

翻訳：[マリ国] 王アダド・ベール・ガベが [(この建物を) 新しくした。]

文書61：アダド・ベール・ガベの漏斗型土製釘

翻訳：マリ [国王] アダド・[ベール]・ガ [ベ] の王宮

注釈：この碑文がどのアダド・ベール・ガベに由来するのかは、不明。

文書62：アダド・ベール・[ガベ／アプリ] の息子、あるいは孫の漏斗型土製釘（写真：148-149頁 Fig.16-17,5）

翻訳：[ マリ国王] アダド・ベール・[ガベ／アプリ] の息子、[マリ国王某 ]

文書63：漏斗型土製釘（写真：148-149頁 Fig.16-17,3）

翻訳：マリ [国王某が]（この建物を）新し [くした。]

145 文書64, 文書65。

146 文書58。

147 文書57, 文書60。

148 文書63, 文書68, 文書69。

149 文書61, 文書67（補われた箇所）。両土製釘は、必ずしも王宮に取り付けられていたとは限らない。マリ国王の命によって建設された他の建築物に由来する可能性もある。

150 文書66。

151 文書11-18。

文書64：漏斗型土製釘（写真：148-149頁 Fig.16-17,4）

翻訳：アダドの社殿を「マリ国王某が新しく」した。

文書65：漏斗型土製釘

翻訳：アダドの社殿を「マリ国王某が新しくした。」

文書66：エテル・ピー・アダドの漏斗型土製釘（写真：148-149頁 Fig.16-17,2）

翻訳：「マリ国王エテル・ピー・アダドが（この建物を）」[その息子] エンリル・「アブラ・ウツルのために建立させた。」

注釈：破損部の補完は、エテル・ピー・アダドの同一の碑文であると考えられる煉瓦碑文に基づく。この煉瓦碑文は、保存状態の悪い極めて小さな煉瓦断片七点に残っている（文書11-17）。

文書67：漏斗型土製釘（写真：148-149頁 Fig.16-17,1）

翻訳：「マ」リ「国王某の息子であったマリ国王某の息子であるマリ国王某の王宮」

文書68：土製釘頭部

翻訳：「マリ国王某が」（この建物を）新しくした。

注釈：ここで提案した破損部の補完は、文書57と文書60にある文書類型に基づいている。しかし、この碑文の破損している冒頭部に（文書58、文書64、文書65と同様）改修された建築物の名前が言及されていた可能性も否定できない。後者の場合、言及されていた建築物がタベトゥのアダド神殿である可能性もある。

文書69：土製釘頭部

翻訳：「マリ国王某が（この建物を）新し」くした。

注釈：ここで提案した破損部の補完は、文書57と文書60にある文書類型に基づいている。しかし、この碑文の破損している冒頭部に（文書58、文書64、文書65と同様）改修された建築物の名前が言及されていた可能性も否定できない。後者の場合、言及されていた建築物がタベトゥのアダド神殿である可能性もある。

#### 4. 碑文入り土器（文書70-71）

タル・タバンの発掘によって発見された碑文入りの土器に関しては、おそらくアダド・パール・アプリの資産である事を示す注記が付記されていたと考えられる貯蔵容器(?)の断片一点が発見されている他<sup>152</sup>、内側にあるマリ国王の建築碑文が一行書きで記された平らな鉢の断片が見つまっている（文書70 写真：150頁 Fig.20）。この鉢の直径は、18,4cm。碑文は円を描くように記されており、その直径は11,8cmになる。文字の底部は、内側を向いている。角度230度になる欠損部には、最大で25文字ほどの楔形文字を補える余地がある。碑文は、その一部のみが残っている。そこでは、荒れ果てたある建築物をあるマリ国王 — その名前は残念ながら分からない — が改修したことが報告されている。おそらく、ある神殿の改修工事ではないかと考えられる。碑文の文面は次の通

152 文書71 写真：148-149頁 Fig.16-17,6。

り。「我が父祖たる前任者達が建立 [した]... 殿が [荒れ果てた] 際, マリ国王某の息子であったマリ国王某の息子であるマリ国王某が (これを) 新しくした。」」

## 参考文献表

W. Andrae

1977 *Das wiedererstandene Assur*, Zweite, durchgesehene und erweiterte Auflage herausgegeben von Barthel Hrouda, München.

R. Borger

1964 *Einleitung in die assyrischen Königsinschriften*, Erster Teil: Das zweite Jahrtausend v. Chr., Handbuch der Orientalistik, Ergänzungsband V, Keilschrifturkunden, I. Abschnitt, Leiden.

E. Cancik-Kirschbaum

1999 “Nebenlinien des assyrischen Königshauses in der 2. Hälfte des 2. Jts. v. Chr.”, *AoF* 26, pp. 210–222.

A. Cavigneaux/ B. K. Ismail

1990 “Die Statthalter von Suḫu und Mari im 8. Jh. v. Chr.”, *BaM* 21, pp. 321–456, Tf. 35–38.

E. Forrer

1921 *Die Provinzeinteilung des assyrischen Reiches*, Leipzig.

H. Freydank

1991 *Beträge zur mittellassyrischen Chronologie und Geschichte*, Schriften zur Geschichte und Kultur des Alten Orients 19, Berlin.

A. K. Grayson

1976 *Assyrian Royal Inscriptions*, Bd. II, Wiesbaden.

C. Hemker

1993 “Wandnägeln im Alten Orient”, *MDOG* 125, pp. 113–131.

J. Margueron

1982 “Meskéné/ Emar”, *Dix ans de travaux 1972–1982*, Paris.

S. M. Maul

1992 *Die Inschriften von Tall Bdēri*, Die Ausgrabungen von Tall Bdēri Band 1, BBVO Texte Band 2, Berlin.

1999 “New Information about the Rulers of Ṭābētu”, *al-Rāfidān* 20, pp. 49–55.

2005 *Die Inschriften von Tall Ṭābān (Grabungskampagnen 1997–1999): Die Könige von Ṭābētu und das Land Māri in mittellassyrischer Zeit*, ASJ SS 2, Tokyo.

A. R. Millard

1970 “Fragments of Historical Texts from Nineveh: Middle Assyrian and Later Kings”, *Iraq* 32, pp. 167–176, Pl. XXXIII–XXXVII.

K. Ohnuma, H. Numoto, Y. Okada

1999 “Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria: Report of the 1997 Season of Work”, *al-Rāfidān* 20, pp. 1–21, Pl. 1–26.

K. Ohnuma, H. Numoto, M. Shimbo

2000 “Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria (2): Report of the 1998 Season of Work”, *al-Rāfidān* 21, pp. 1–17, Pl. 1–33.

K. Ohnuma, H. Numoto

2001 “Excavation at Tell Taban, Hassake, Syria (3): Report of the 1999 Season of Work”, *al-Rāfidān* 22, pp. 1–11, Pl. 1–49.

E. F. Weidner

1935 “Tukulti-Mêr”, *Miscellanea Orientalia dedicata Antonio Deimel annos LXX complenti*, AnOr 12, pp. 336–338.

1952/53 “Die Bibliothek Tiglatpilesers I.”, *AfO* 16, pp. 197–215.





Fig. 1 (文書 2)



Fig. 2 (文書 2)





Fig. 3 (文書 3)



Fig. 4 (文書 4)



Fig. 5 (文書 4)



Fig. 6 (文書 5)





Fig. 7 (文書 6)



Fig. 8 (文書 7)



Fig. 9 (文書 7)



Fig. 10 (文書 8)



Fig. 11 (文書9)



Fig. 12 (文書9)





Fig. 13 (文書10)

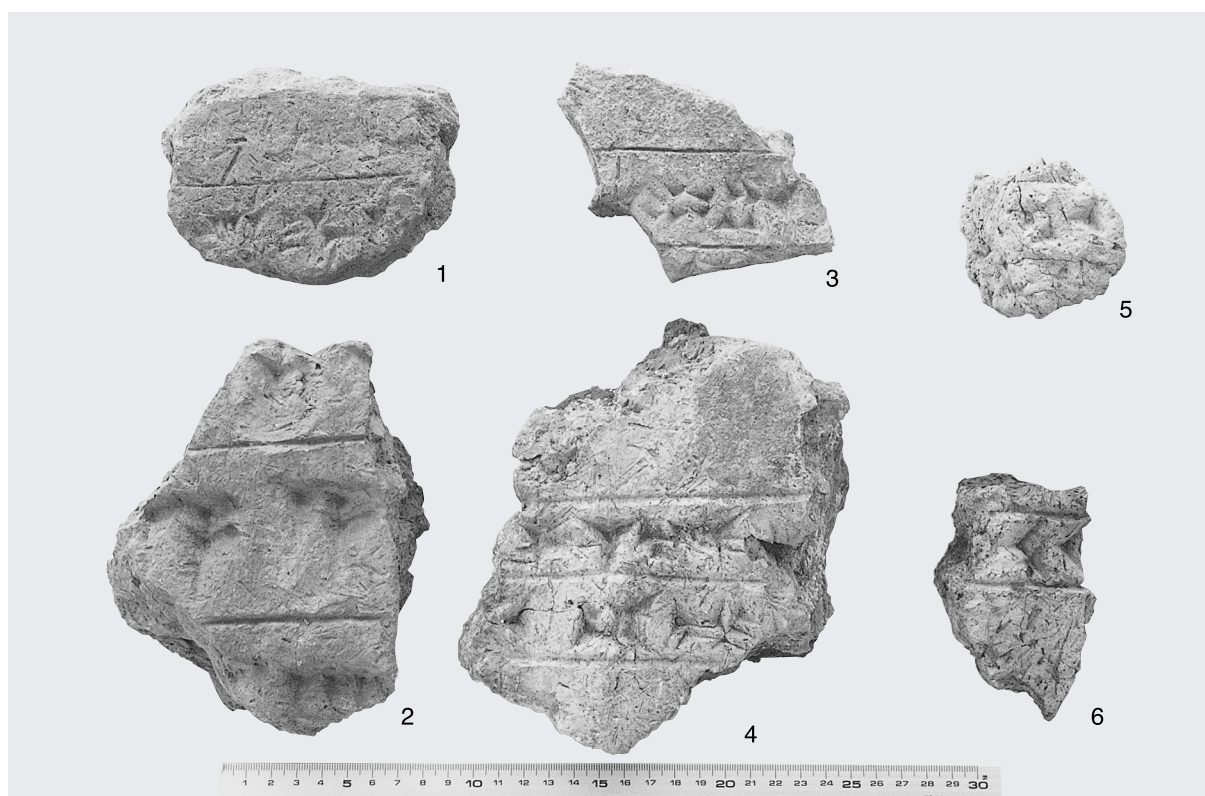


Fig. 14 (1: 文書32 2: 文書40 3: 文書28 4: 文書24 5: 文書13 6: 文書52)

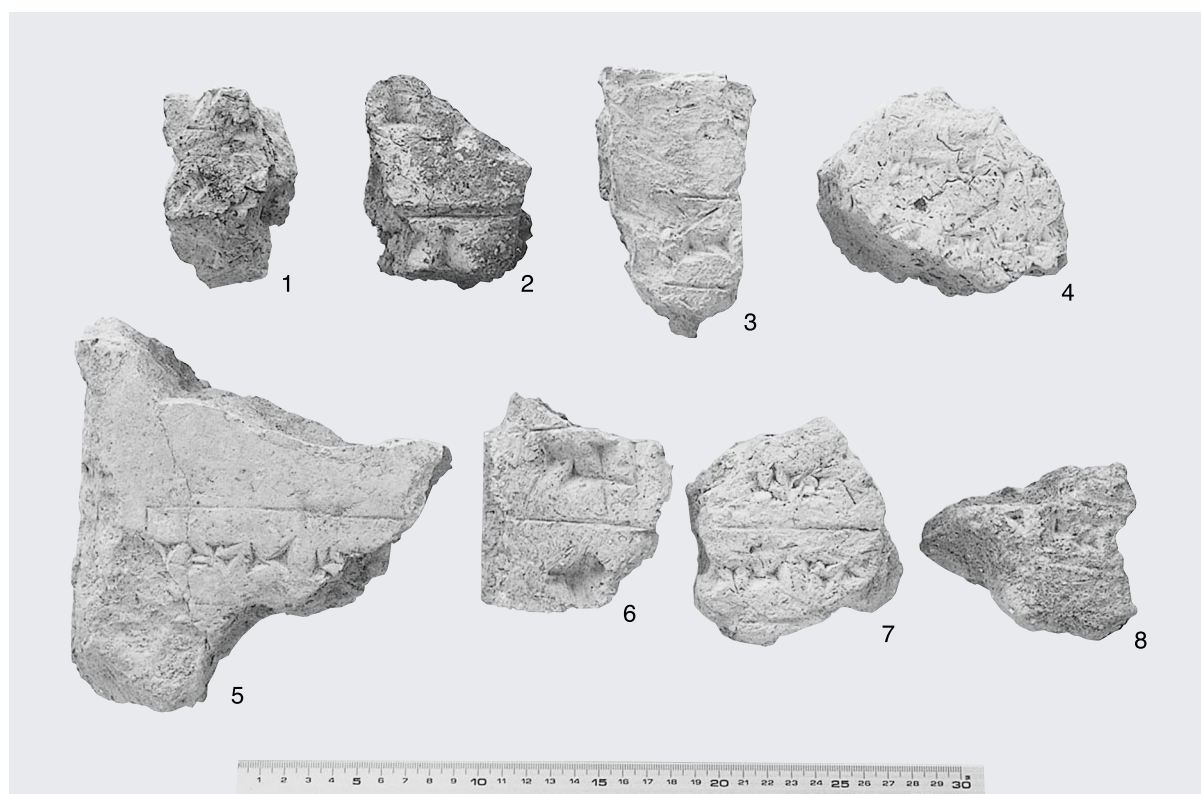


Fig. 15 (1: 文書53 2: 文書54 3: 文書15 4: 文書25 5: 文書14 6: 文書38 7: 文書16 8: 文書29)



Fig. 16 (1: 文書67 2: 文書66 3: 文書63 4: 文書64 5: 文書62 6: 文書71)



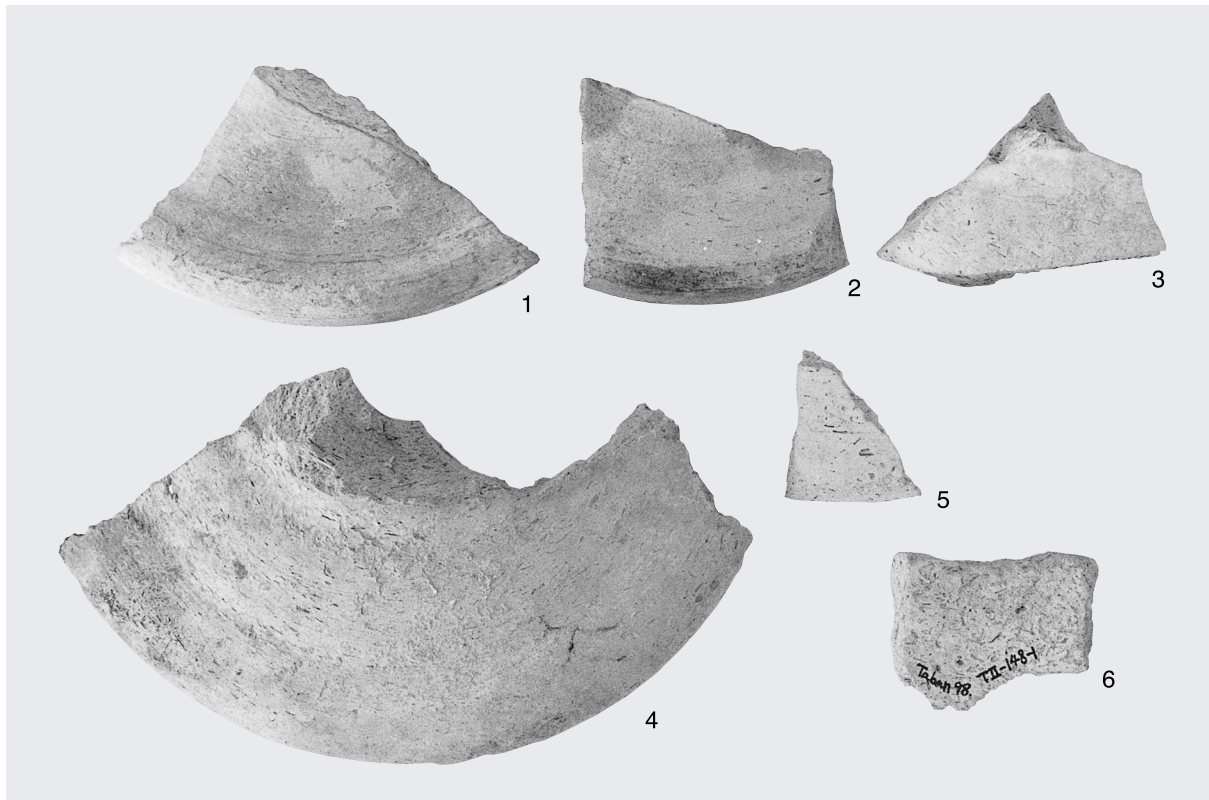


Fig. 17 (1: 文書67 2: 文書66 3: 文書63 4: 文書64 5: 文書62 6: 文書71)



Fig. 18 (文書58)



Fig. 19 (文書58)



Fig. 20 (文書70)


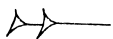

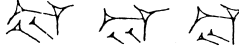
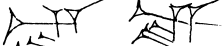

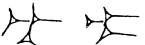
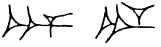



## マリ国王碑文楔形文字表



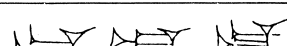




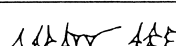

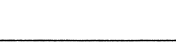
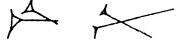
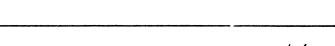












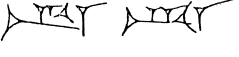
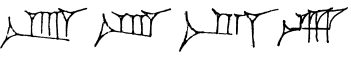
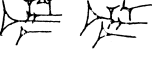



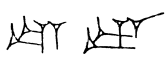

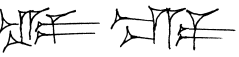

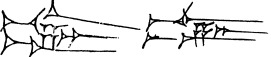
## マリ国王碑文楔形文字表

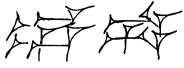

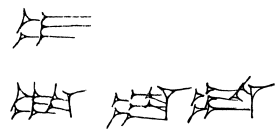
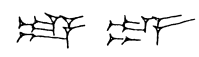
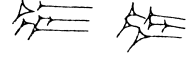


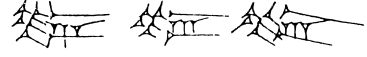





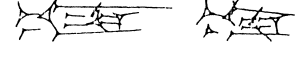

中期アッシリア時代に作成されたマリ国王碑文にて用いられている楔形文字の書体全てを以下に表にしてまとめる。本論文において取り扱われているタル・タバン出土碑文の他、タル・ブデリ出土碑文も考慮に入れてある。

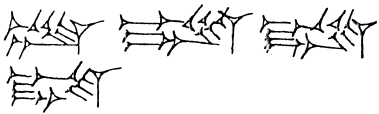
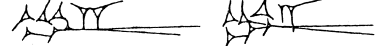


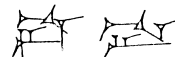

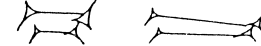

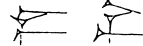
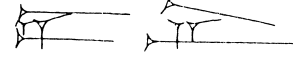

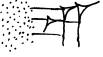
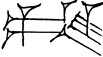

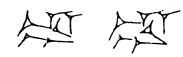

訳注) 技術的な問題から、表中に用いられている独語表記は和訳していない。

ABZ-Nr.	Zeichenname	Silbenwert	logographische Lesung	Zeichenformen
1	DIL	<i>aš; ina</i>	AŠ = <i>Aššur</i>	
2	HAL	<i>hal</i>		
3	MUG	<i>muq</i>		
5	BA	<i>ba</i>		
7	SU	<i>su</i>		
9	BAL		<i>ikribu</i>	
12	TAR	<i>tar</i>		
13	AN	<i>an</i>	DINGIR = <i>ilu</i> ; Det. vor GN <sup>(d)</sup> ; AN = <i>šamû</i> ; in der Ligatur <sup>d</sup> +EN  in der Ligatur <sup>d</sup> +A	  
15	KA	<i>ka</i>	<i>pû</i>	

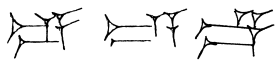

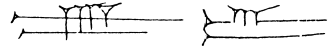

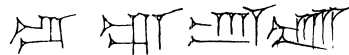

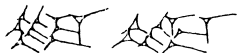
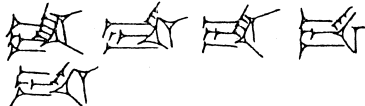
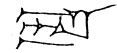
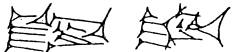
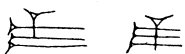

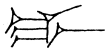


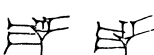
38	URU		<i>ālu</i> ; Det. vor ON ( <sup>uru</sup> )	
52	ITI		Det. vor MN ( <sup>iti</sup> )	
55	LA	<i>la</i>		
56	APIN		in: <sup>iti</sup> APIN = <i>araḥsamna</i>	
57	MAḤ		in: É-gal-maḥ	
58	TU	<i>tu</i>		
59	LI	<i>li</i>		
60	PAP		PAP = <i>naṣāru</i> ; KÚR = <i>nakāru</i>	
61	MU	<i>mu</i>	<i>šattu</i> ; <i>šumu</i>	
62	QA	<i>qa</i>		
63a	KÁT	<i>kát</i>		
68	RU	<i>ru</i>		
69	BE	<i>be</i> ; <i>bat</i> ; <i>bít</i> ; <i>tel</i>		
70	NA	<i>na</i>  in: <i>i+na</i>		
72	NUMUN		<i>zēru</i>	



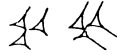

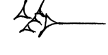
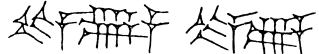




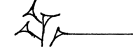



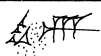


73	TI	<i>ti</i>		
74	BAR	<i>bar; maš</i>		
75	NU	<i>nu</i>		
78	ĦU	<i>ĥu</i>		
80	IG	<i>ik; iq, eq</i>	in: <sup>gi</sup> IG = <i>daltu</i>	
83	ŠĪTA	<i>rat</i>		
84	ZI	<i>zi, ze</i>	<i>kettu</i>	
86	RI	<i>ri, re</i>		
87	NUN	<i>nun</i>	<i>rubû, rubā'u</i>	
97	AG	<i>ak</i>		
99	EN		<i>bēlu</i> ; in <sup>d</sup> EN.KI = <sup>d</sup> Ea; in der Ligatur <sup>d</sup> +EN	 
101	ŠUR	<i>šur</i>		
111	GUR		<i>târu, tuāru</i> in: <sup>d</sup> U.GUR	
112	SI		in: SI.SÁ = <i>ešēru, ešāru</i>	
115	SAG	<i>riš</i>		
122	MÁ	<i>má</i>		
131	AZ	<i>as, aš</i>		

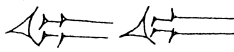

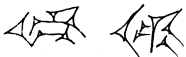


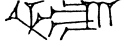
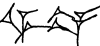

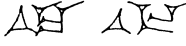

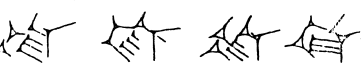


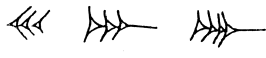


133	KÁ		<i>bābu</i> ; in: KÁ.GAL = <i>abullu</i>	
139	TA	<i>ta</i>		
142	I	<i>i</i>  in: <i>i+na</i>		
142a	IA	<i>ia</i>		
143	KÁM		.KÁM (nach Ordinalzahlen)	
144	TUR		DUMU = <i>māru</i> ; in: IBILA = <i>aplu</i>	
147	ZÍ	<i>ši, še</i>		
148	IN		in: IN.SAR	
151	LUGAL		<i>šarru</i>	
152,8	BÀD		<i>dūru</i>	
164	SUM	<i>šúm</i>		
167	GAB	<i>gab</i>		
170	AM	<i>am</i>		
183	ÁG		<i>rāmu, ra'āmu</i>	
191	KUM	<i>qu</i>		

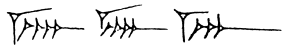
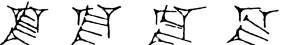

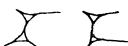


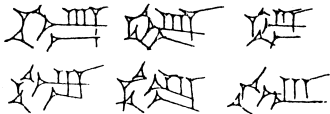

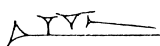


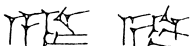




201	SUḪUŠ		<i>uššū</i>	
205	IL	<i>il</i>		
208	ANŠE		<i>emāru</i>	
209	EGIR		<i>arkû, urkû</i>	
211	UŠ	<i>uš</i>		
212	IŠ	<i>iš</i>		
214	BI	<i>bi</i>		
215	ŠIM	<i>šem</i>		
230	GAG	<i>qaq</i>	DÛ = <i>epēšu, epāšu</i>	
231	NI	<i>ni</i>		
232	IR	<i>ir, er</i>		
237	AMA		DAGAL = <i>rapāšu</i>	
2951	NUSKA		in: <sup>d</sup> <i>Nuska</i>	
296	GIŠ	<i>iš</i>	<i>ešēru, ešāru</i> ; Det. in: <i>gišTukul-ti(-)</i> ; <i>gišIG</i>	
298	AL	<i>al</i>		
307	MAR	<i>mar</i>		



308	E	<i>e</i>		
314	ŠID	<i>lak</i>		
318	Ú	<i>ú; šam</i>		
319	GA	<i>ga</i>	in: <sup>uru</sup> DÙG.GA-bel/ba-ta/telti; in: ŠE.GA = <i>šemû, šamā'u</i>	
324	É		<i>bītu</i> ; in: É.GAL = <i>ekallu</i> ; in: É-šár-ra	
328	RA	<i>ra</i>		
331	SAR		SAR = <i>šaṭāru</i>	
334	ID	<i>it; eṭ</i>	Á = <i>aḥu</i>	
335	DA	<i>da</i>		
336	LIL	<i>lil</i>		
339	ÁŠ	<i>áš</i>		
342	MA	<i>ma</i>		
343	GAL		GAL= <i>rabû, rabiû</i> ; in: É.GAL = <i>ekallu</i> ; in: KÁ.GAL = <i>abullu</i>	
344	BÁRA		<i>parakku</i>	
346	GIR	<i>piš</i>		
349	BUR	<i>bur</i>		

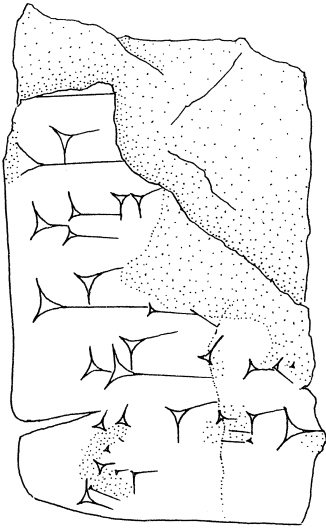
353	ŠA	<i>ša</i>		
354	ŠU	<i>šu</i>		
366	KUR	<i>šaṭ, šeṭ<sub>x</sub>?</i>	<i>mātu; šadû</i>	
367	ŠE	<i>še</i>	in: ŠE.GA = <i>šemû, šamā'u</i>	
371	BU	<i>bu; pu</i>		
375	TIR	<i>tir, ter</i>		
376	TE	<i>te</i>		
377	LIŠ	<i>liš</i>		
381	UD	<i>ud; ut</i>	<i>ûmu; in: <sup>d</sup>UTU = <sup>d</sup>Šamaš</i>	
	UD		in: <sup>d</sup> AMAR.UTU = <sup>d</sup> Marduk	
383	PI	<i>pi, pe</i>		
384	ŠÀ	<i>lib</i>		
393	ERIM		<i>ÉRIN = šābu</i>	
396	ḪI	<i>ḫi, ḫe; šár; ṭé</i>	<i>DÙG = ṭābu;</i> in: <sup>uru</sup> DÙG.GA- <i>bel/ba-ta/tel/ti</i>	
398	AḪ	<i>aḫ</i>		
399	IM		in: <sup>d</sup> IŠKUR = <sup>d</sup> Adad	
411	U	<i>u</i>	<i>X = Adad; UMUN = bēlu;</i> in: <sup>d</sup> U.GUR	

427	MI	<i>mi</i>		
437	AMAR		<i>zēru</i> ; in: <sup>d</sup> AMAR.UTU = <sup>d</sup> Marduk	
441	UL	<i>ul</i>		
449	IGI	<i>lì</i>	<i>amāru</i>	
451	AR	<i>ar</i>		
452	GISKIM		<i>tukultu</i>	
454	SIG <sub>5</sub>		<i>damāqu</i>	
455	Ù	<i>ù</i>		
457	DI	<i>dì, de</i>	in: SI.SÁ = <i>ešēru, ešāru</i>	
459	DU <sub>6</sub>		in: <sup>iti</sup> DU <sub>6</sub> = <i>tašrītu</i>	
	DU <sub>6</sub>		<i>tillu</i>	
461	KI	<i>ki, ke</i>	<i>ašru; eršetu; itte</i> ; in: <sup>d</sup> EN.KI = <sup>d</sup> Ea	
471	MAN	<i>šar<sub>4</sub></i>	MAN = <i>šarru</i> ; Zahl 20	
472	EŠ	<i>eš</i>	in: <sup>d</sup> XXX = <sup>d</sup> Sîn; Zahl 30	
480	DIŠ	<i>ana</i>	Personenkeil; Zahl 1	
532	ME	<i>me</i>		

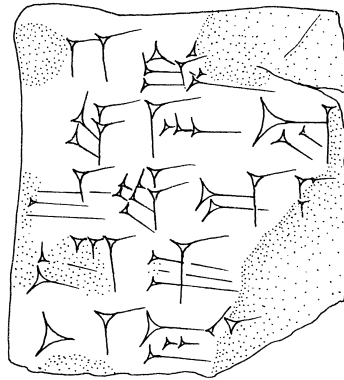
533	MEŠ		Pluralzeichen	
536	KU	<i>ku; tukul</i>		
537	LU	<i>lu; dip</i>	DAB = <i>ṣabātu</i>	
545	ŠÚ	<i>šú</i>		
554	MUNUS	<i>šal</i>		
559	GU	<i>gu</i>		
564	EL	<i>el</i>		
570	MIN		Zahl 2	
574	TUKU		<i>rašû, rašâ'u</i>	
575	UR	<i>lik</i>		
579	A	<i>a</i>	<i>aplu; mârû;</i> <i>Mâri</i> (ON) in: A.A = <i>Mâri</i> (ON)	
579	ÍD		Det. vor FN ( <i>íd</i> )	
586	ZA	<i>za; ṣa</i>		
589	ḪA	<i>ḫa</i>	in: ZÁḪ (ḪA.A) = <i>ḫalāqu</i> ; in: ḪA<.A> = <i>ḫalāqu</i>	
597	NÍG	<i>gar; šá</i>	GAR = <i>šakānu</i> ; in: NÍG.BA = <i>qiāšu, qāšu</i>	
598d	USSU		Zahl 8	

1

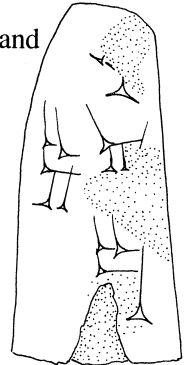
Vs.



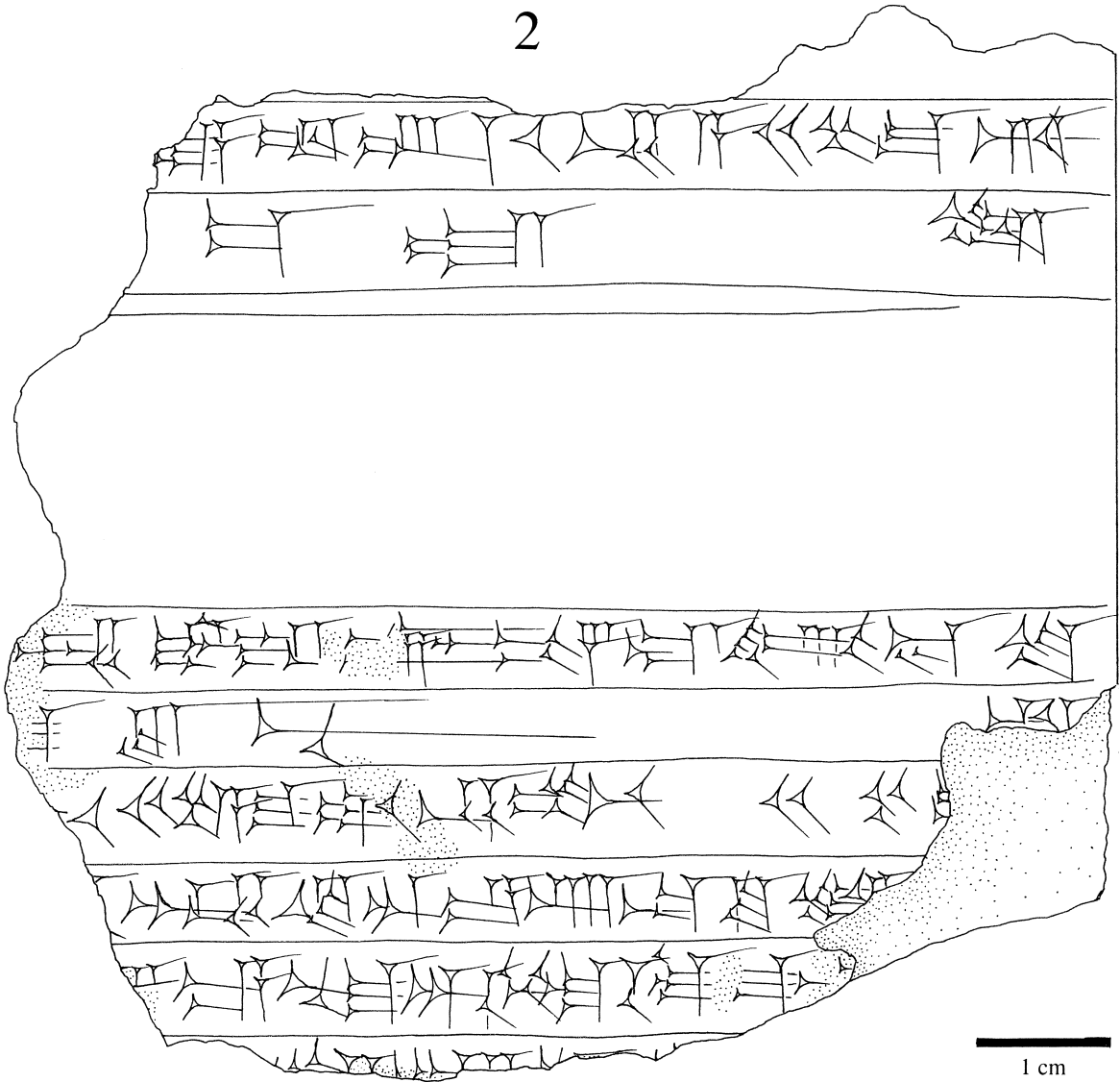
Rs.



linker Rand



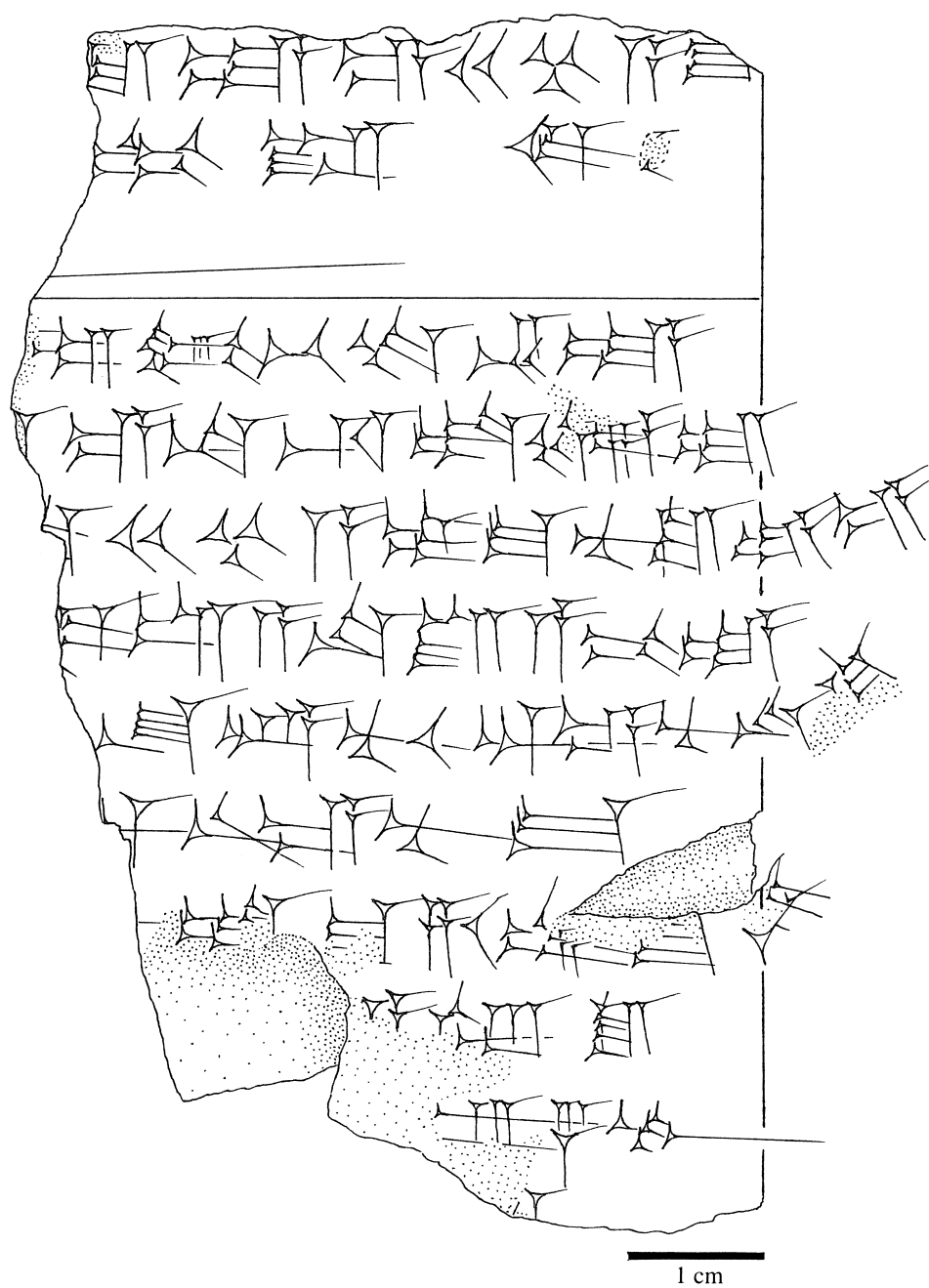
2



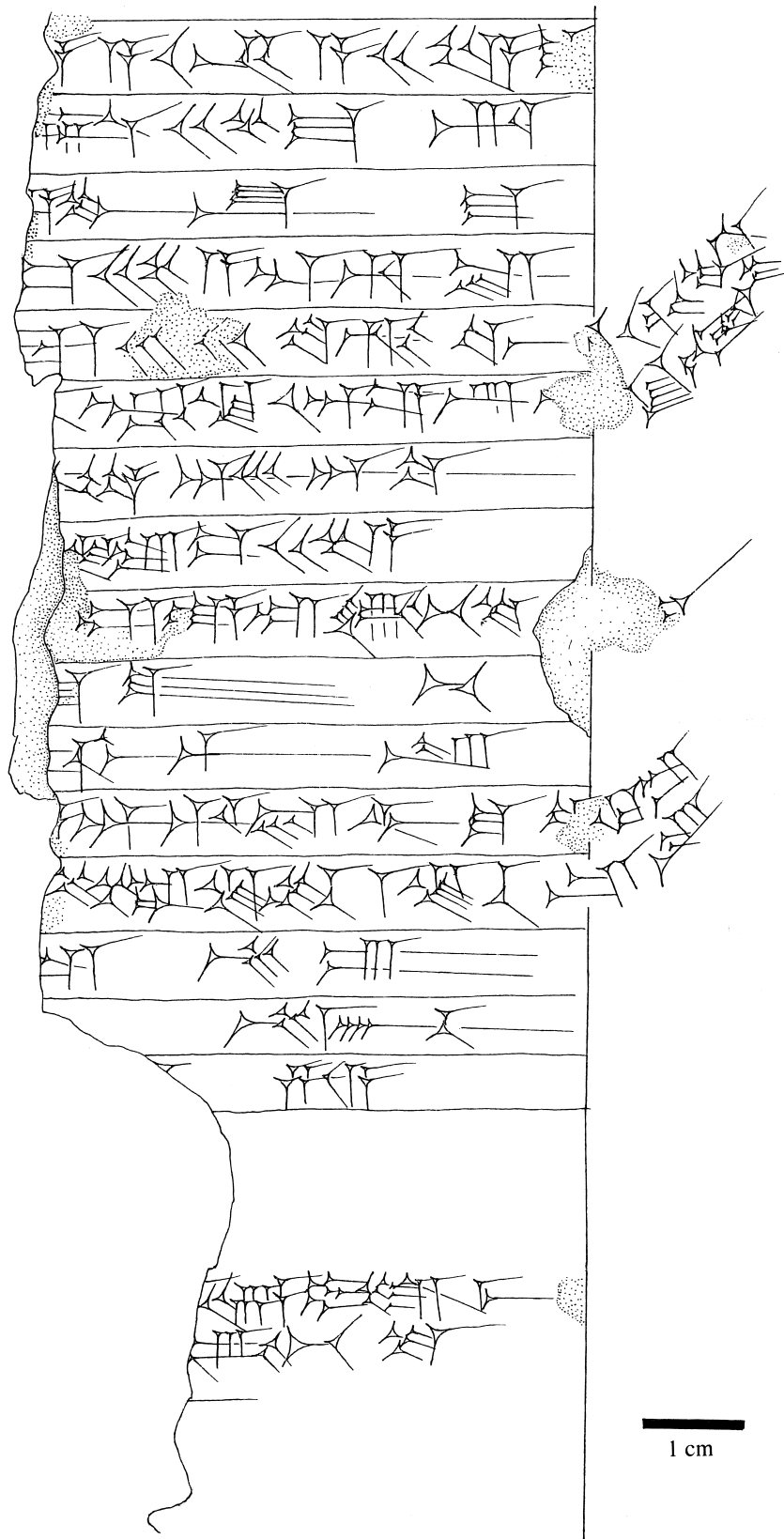
1 cm



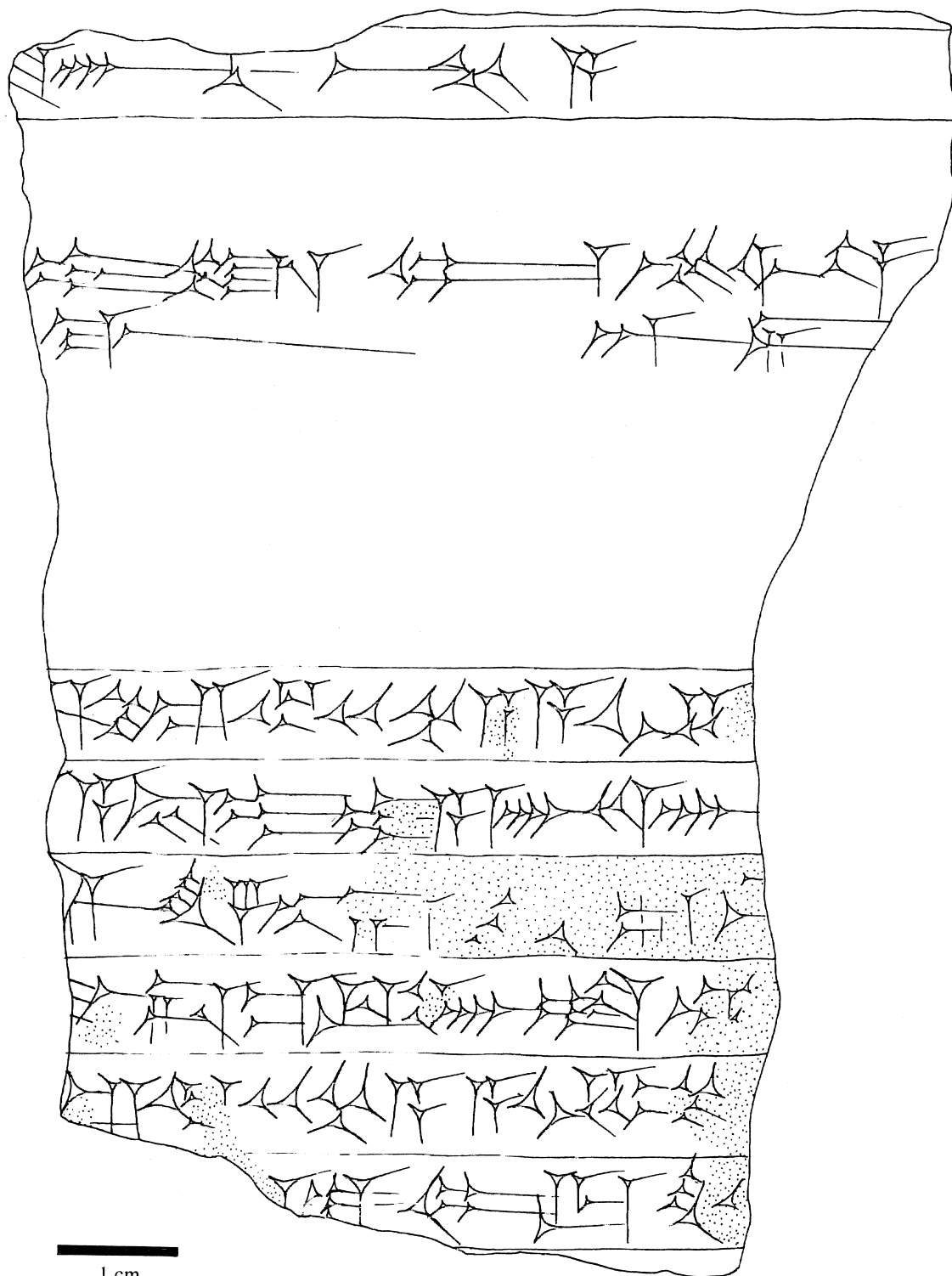
3



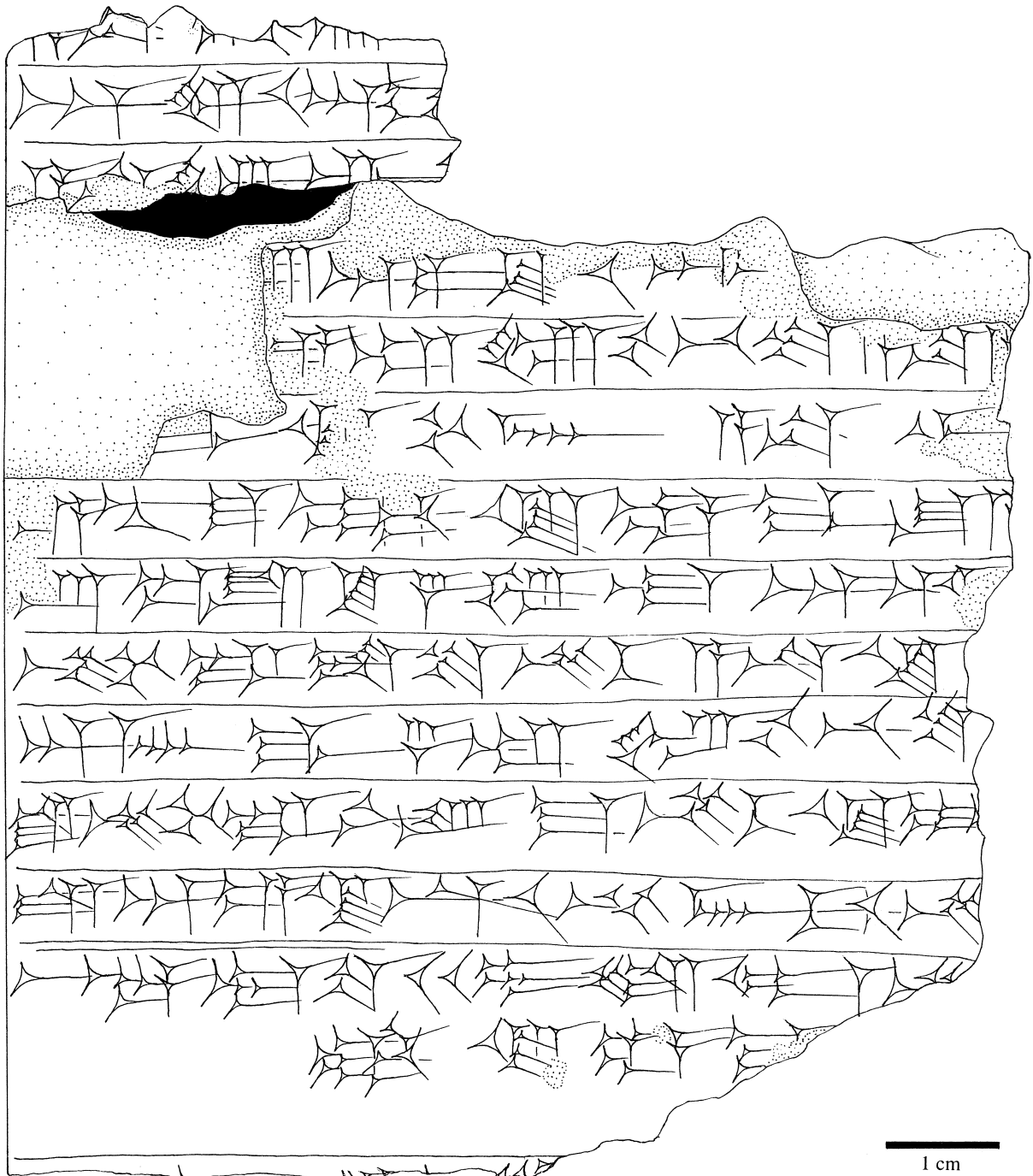
4



5



6

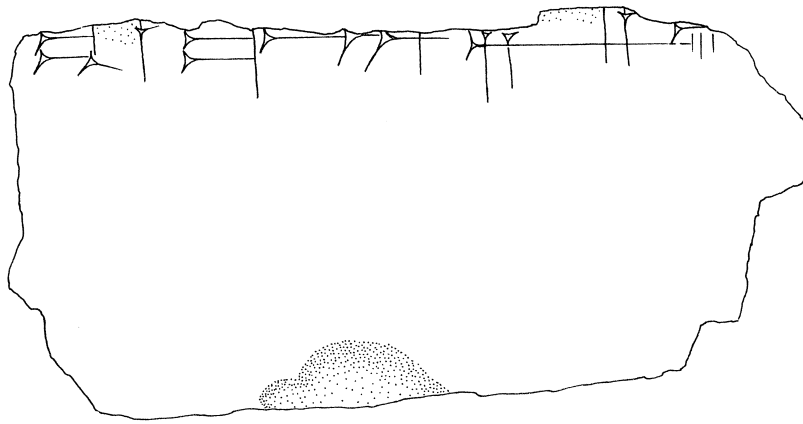




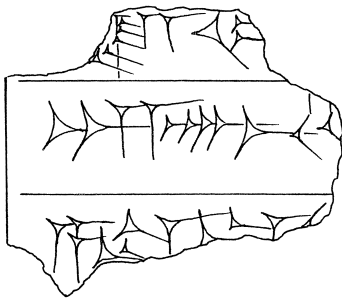
7



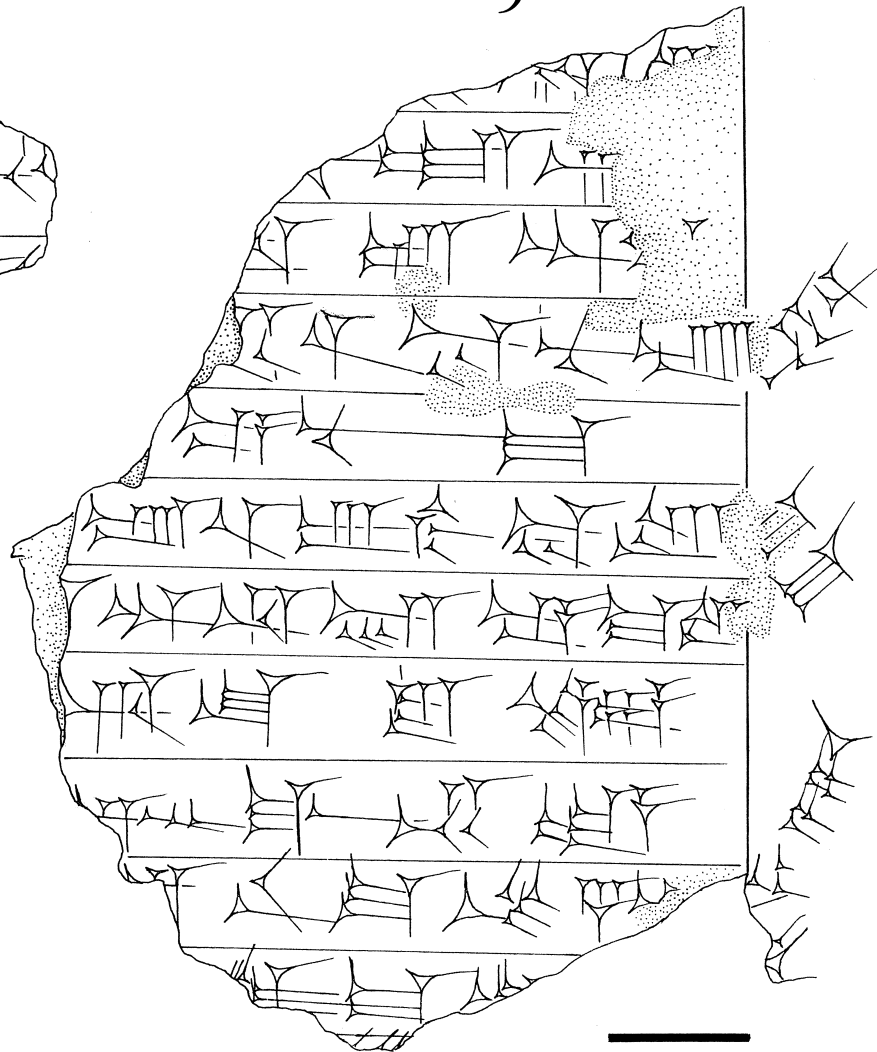
8



10

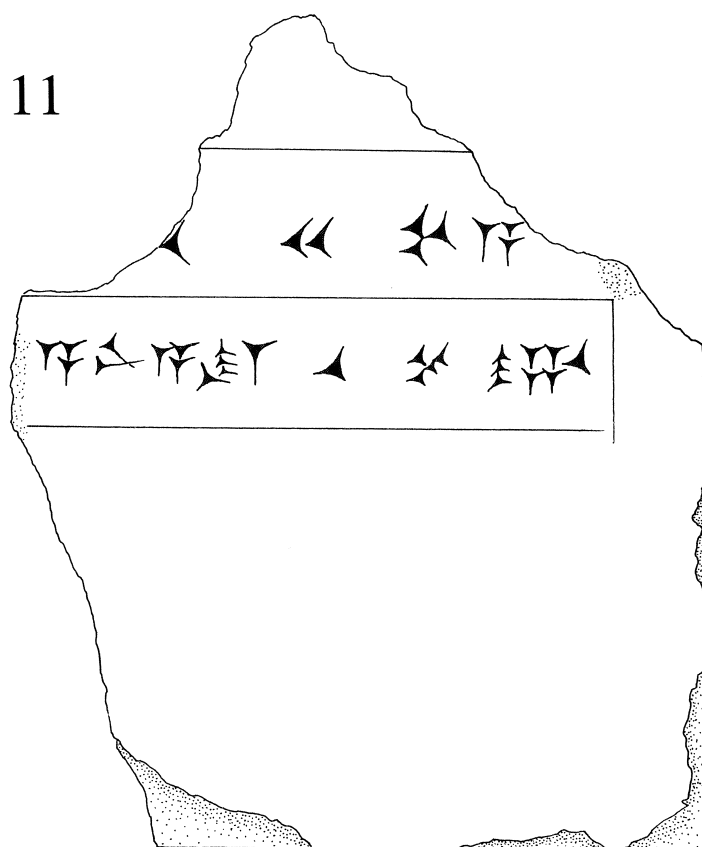


9

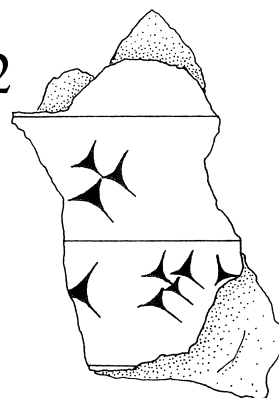


1 cm

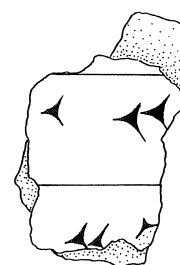
11



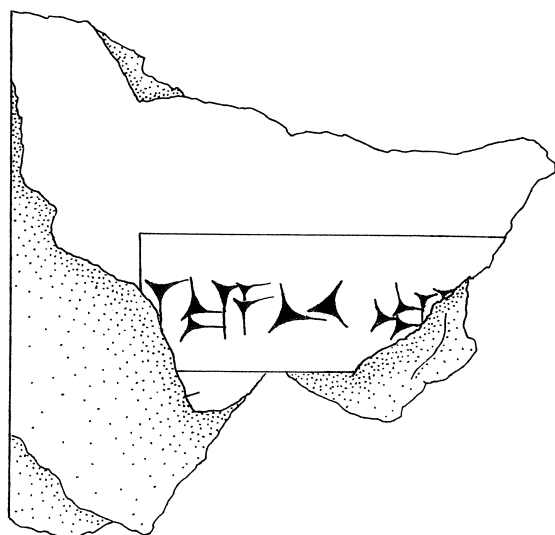
12



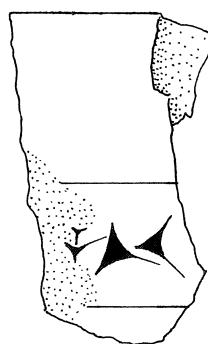
13



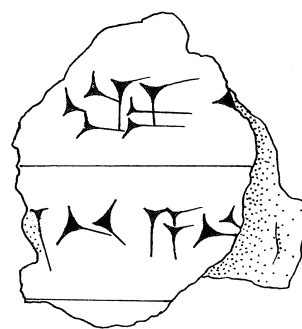
14



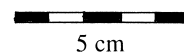
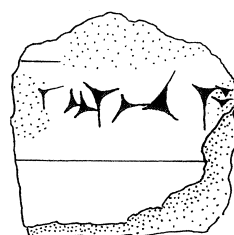
15



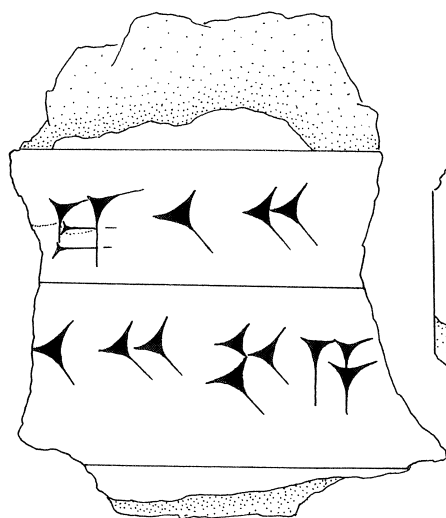
16



17



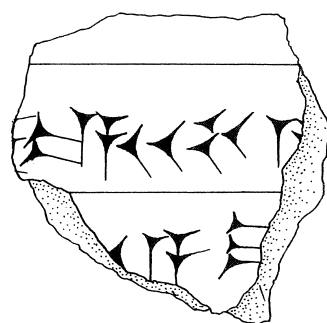
18



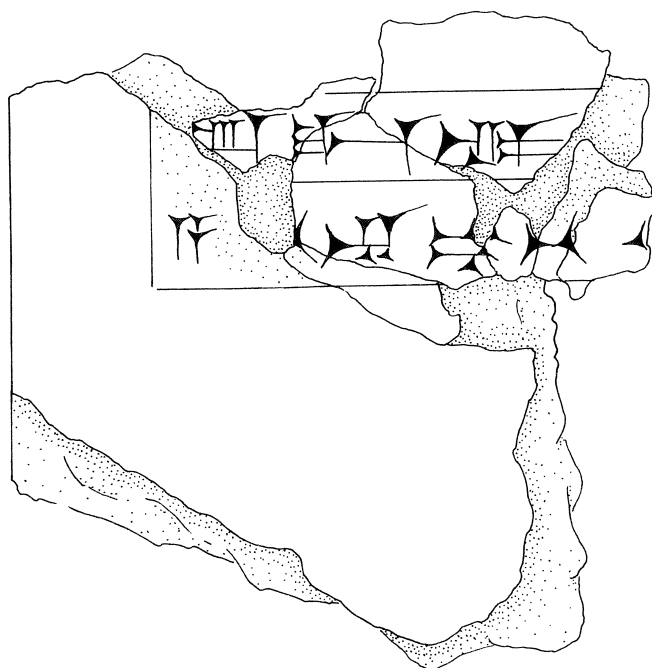
20



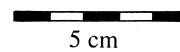
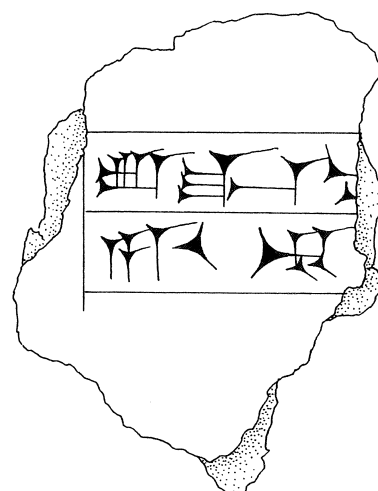
19



21

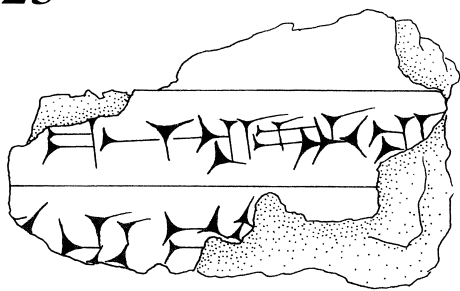


22

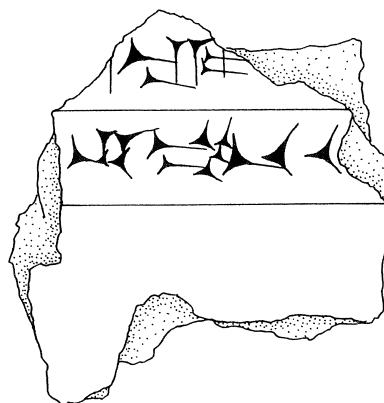




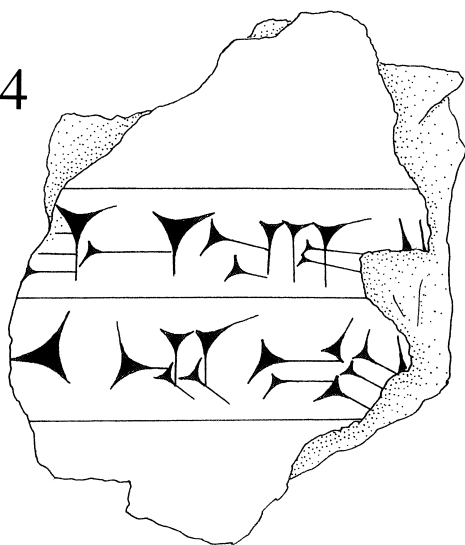
23



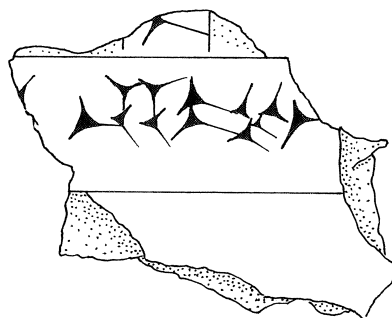
27



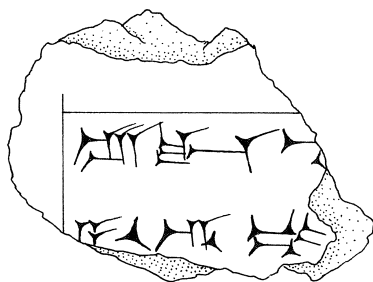
24



28



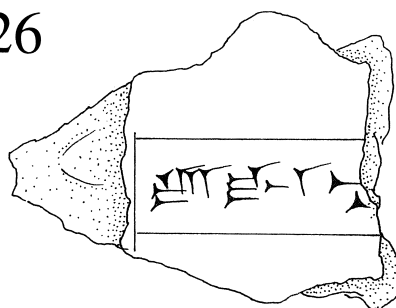
25



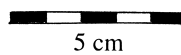
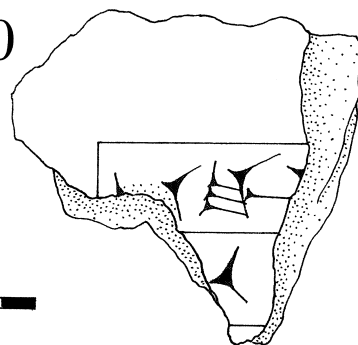
29



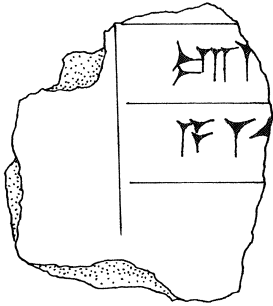
26



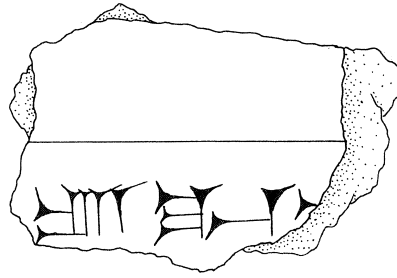
30



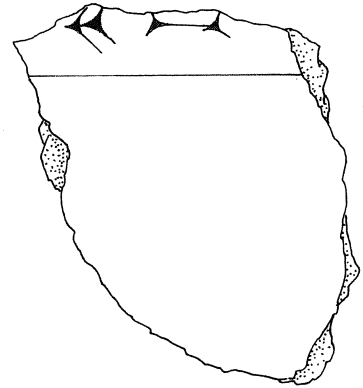
31



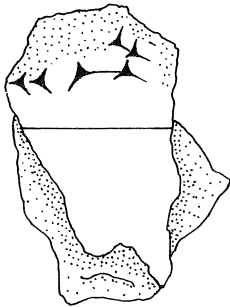
32



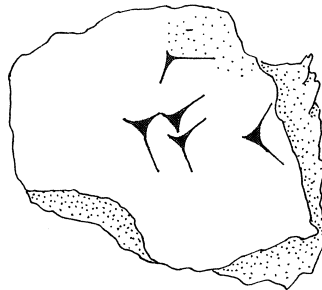
33



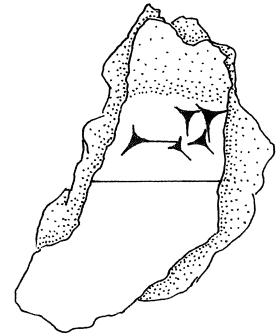
34



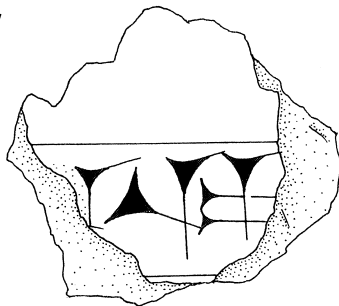
35



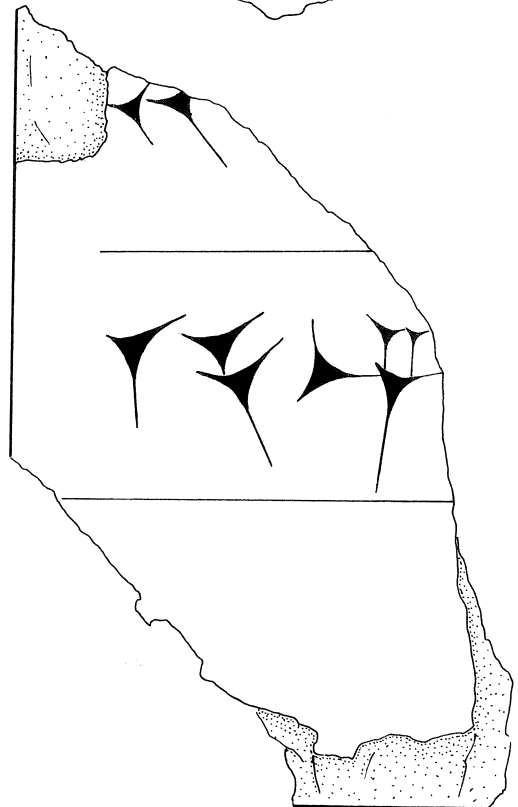
36



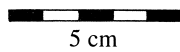
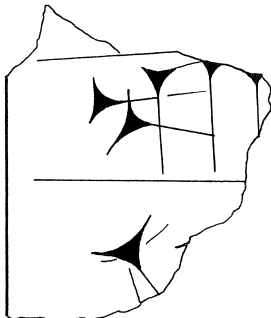
37

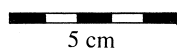
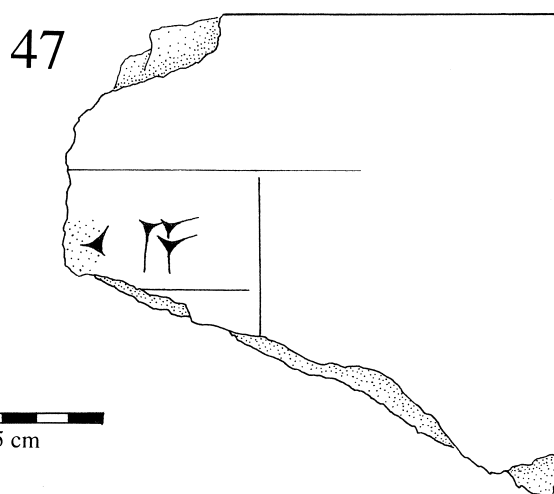
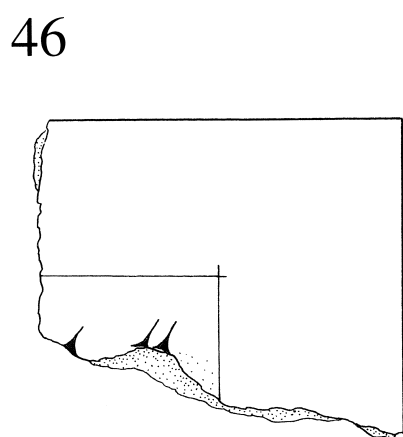
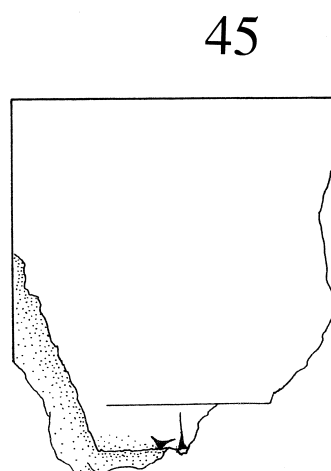
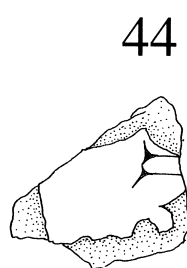
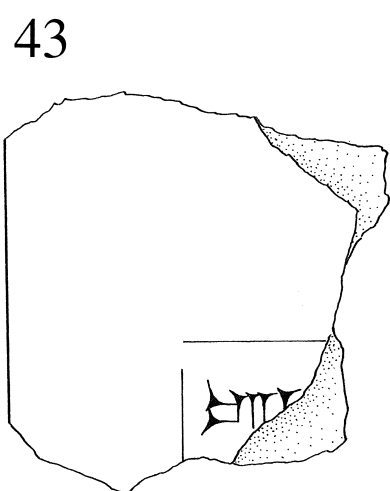
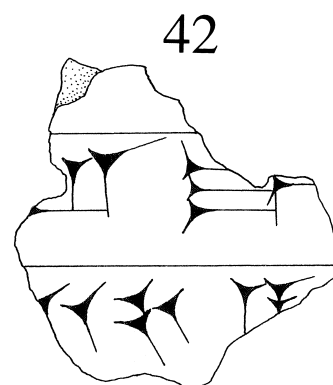
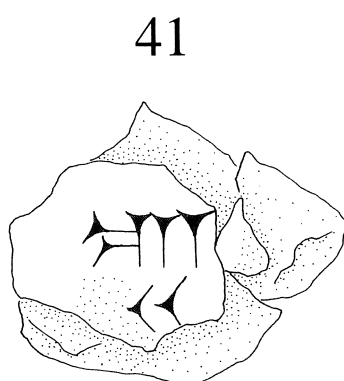
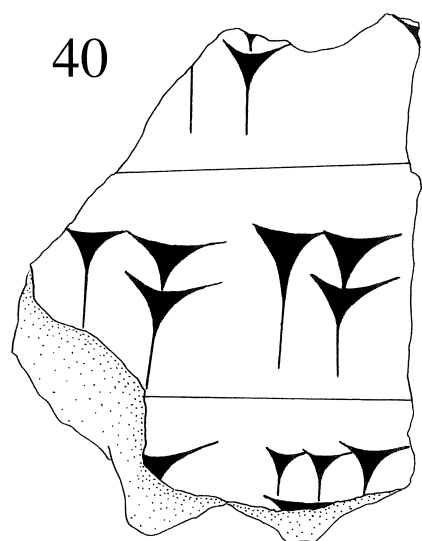


39

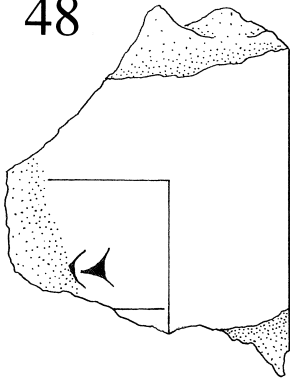


38

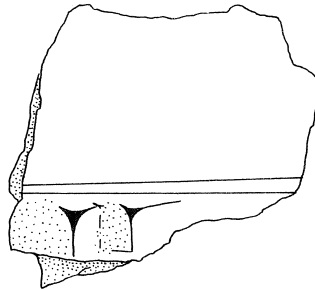




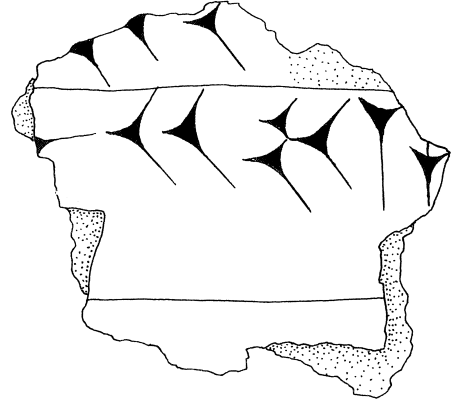
48



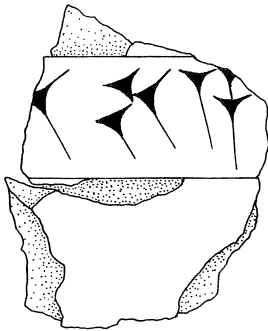
49



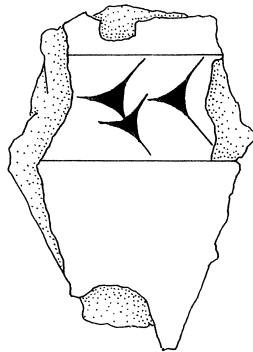
50



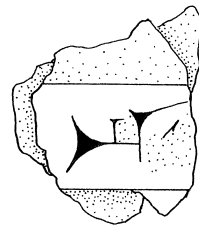
51



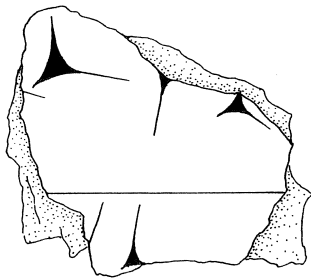
52



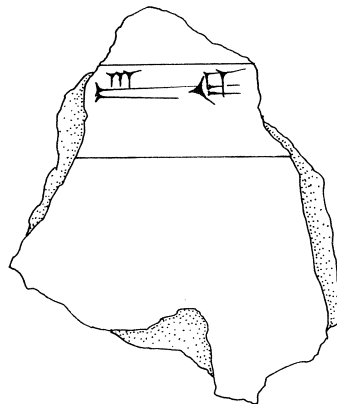
53



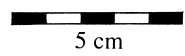
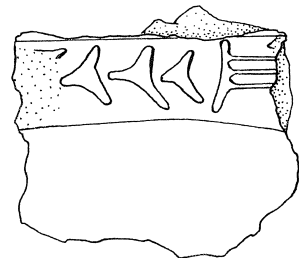
54



55

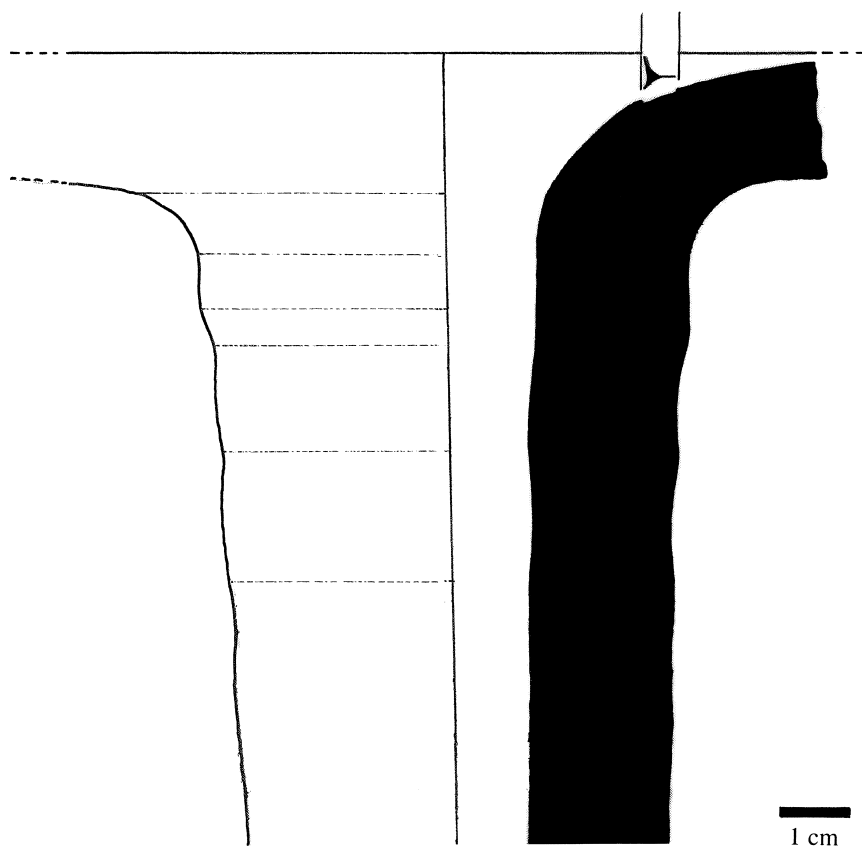
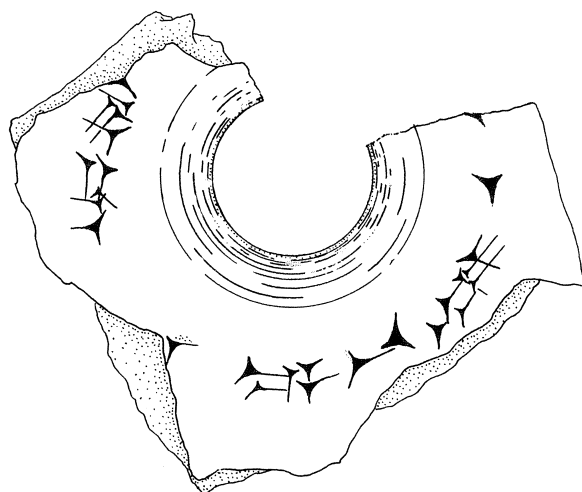


56

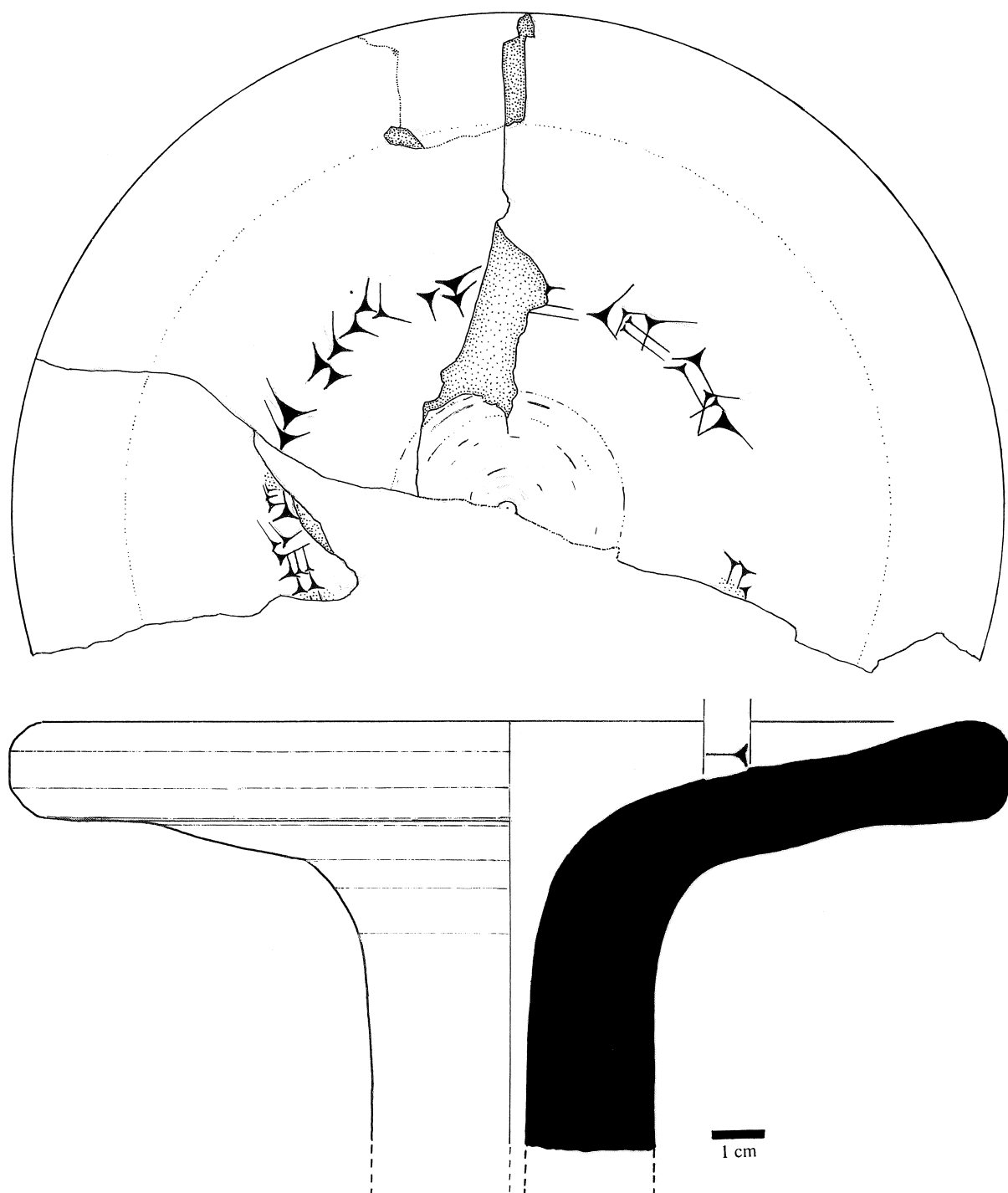




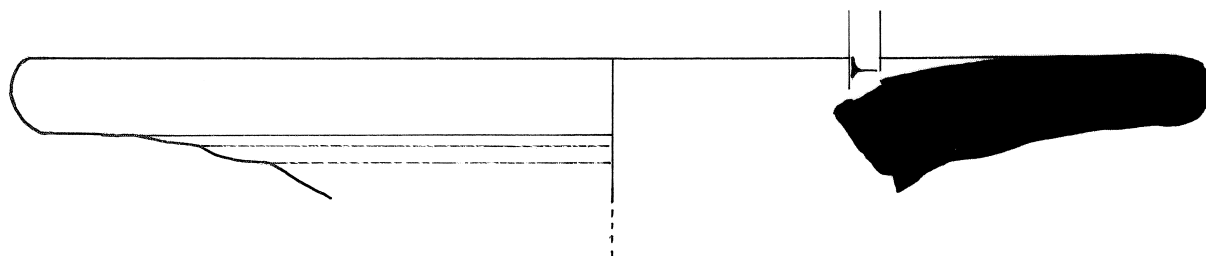
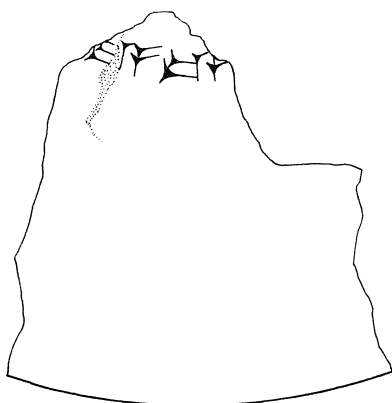
57



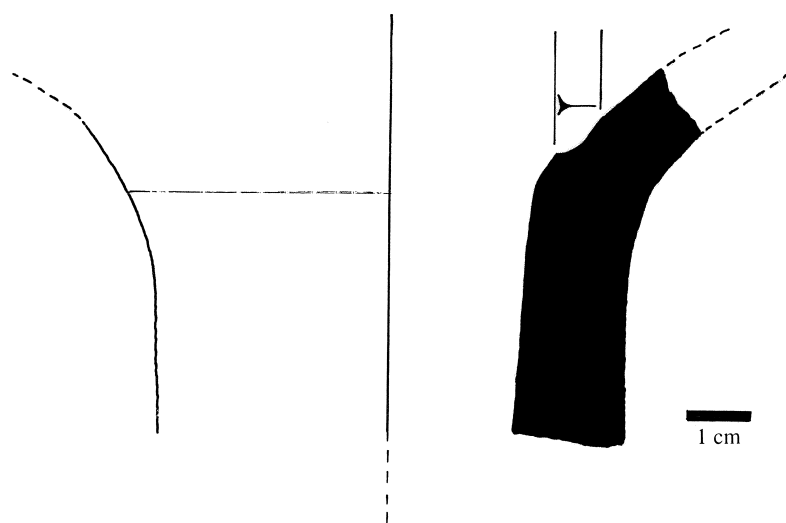
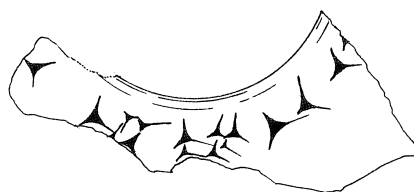
58

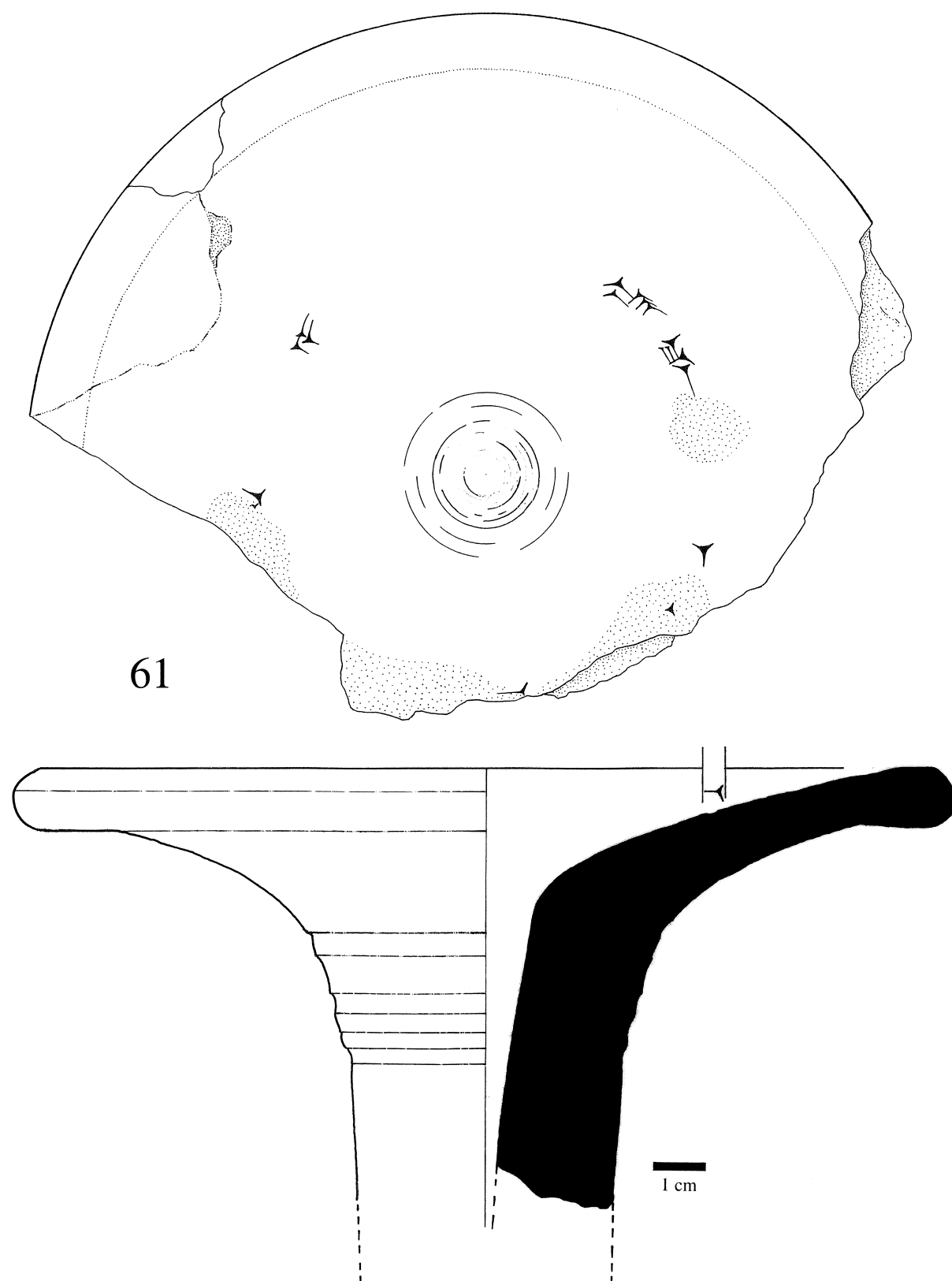


59

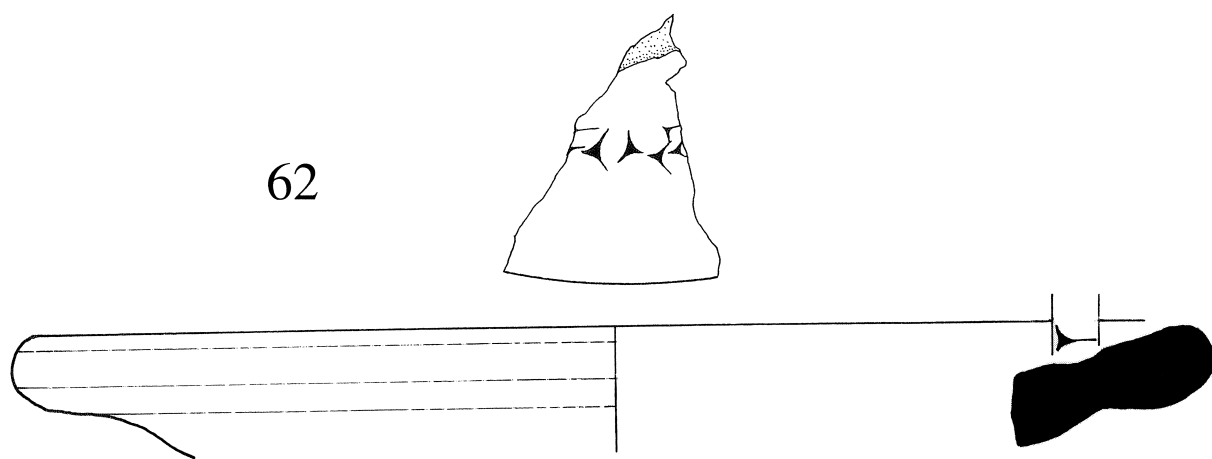


60

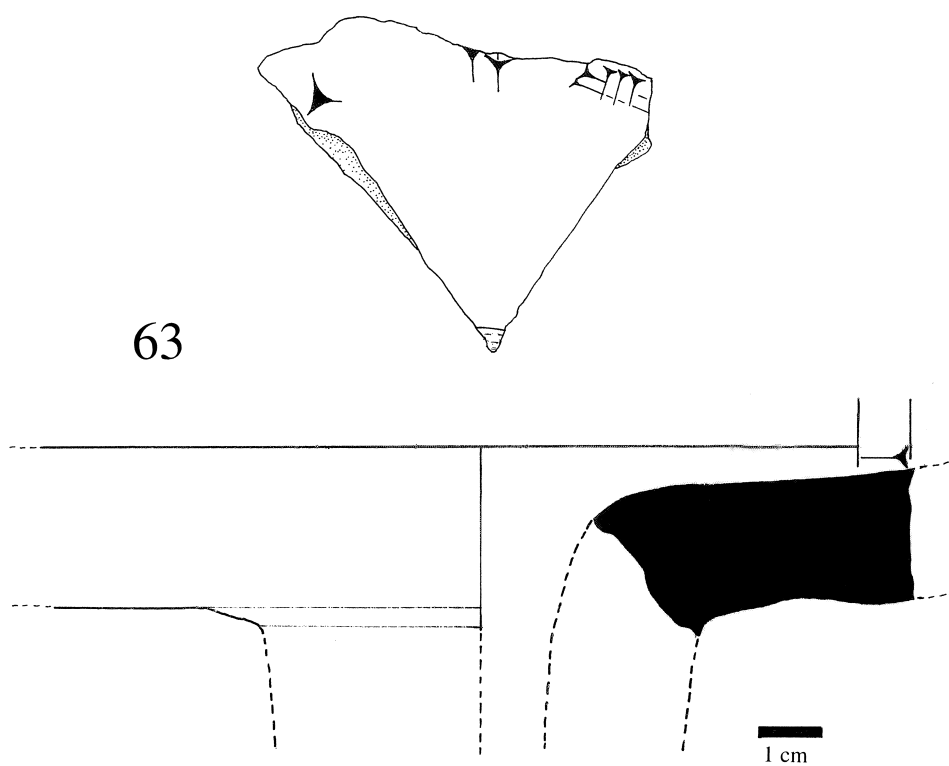




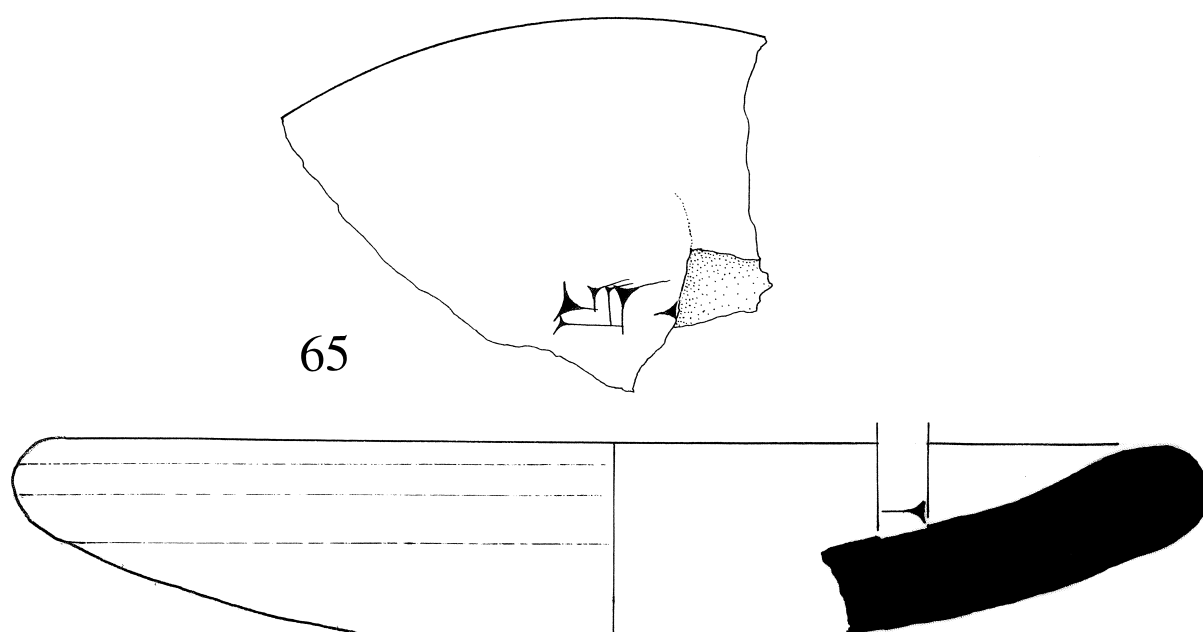
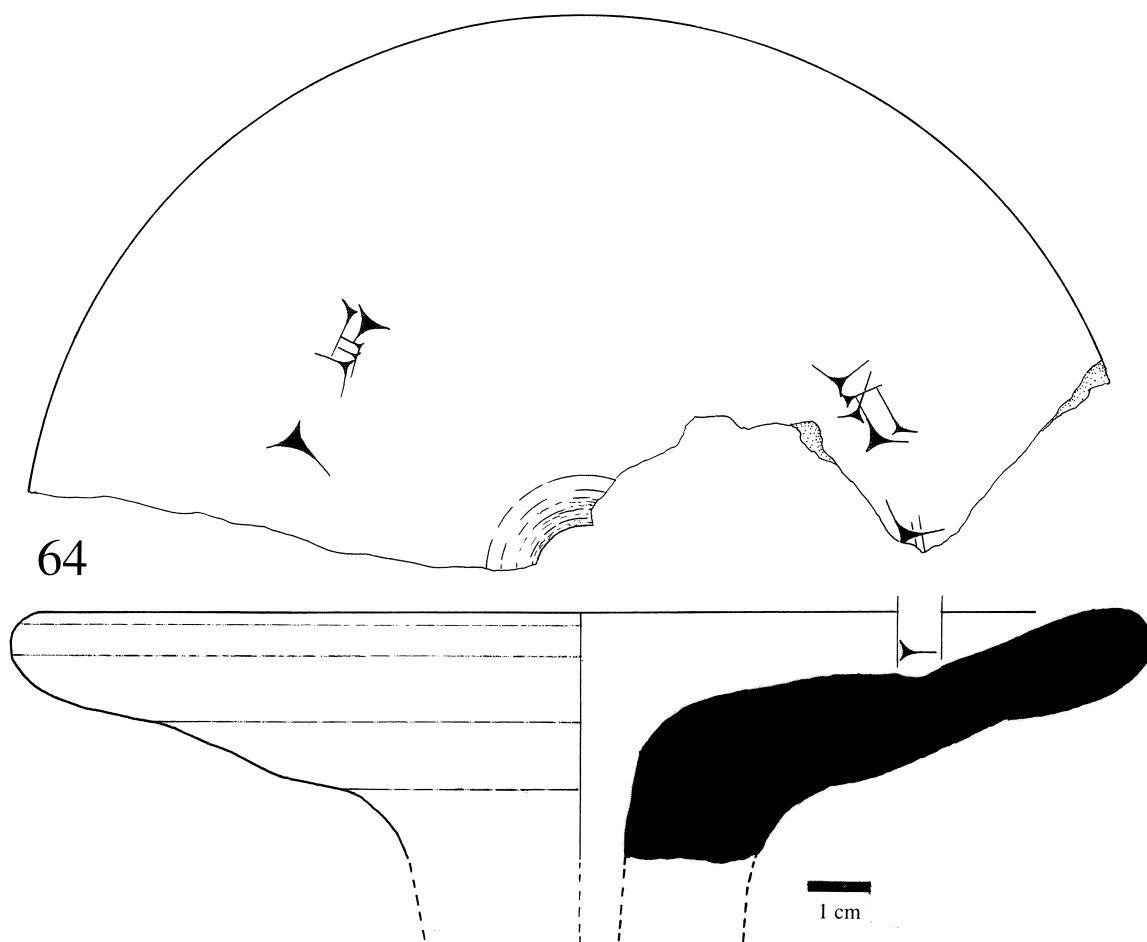
62



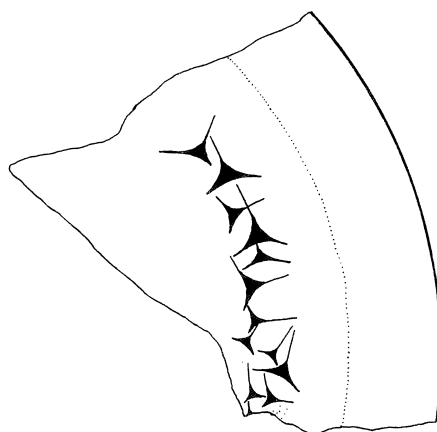
63



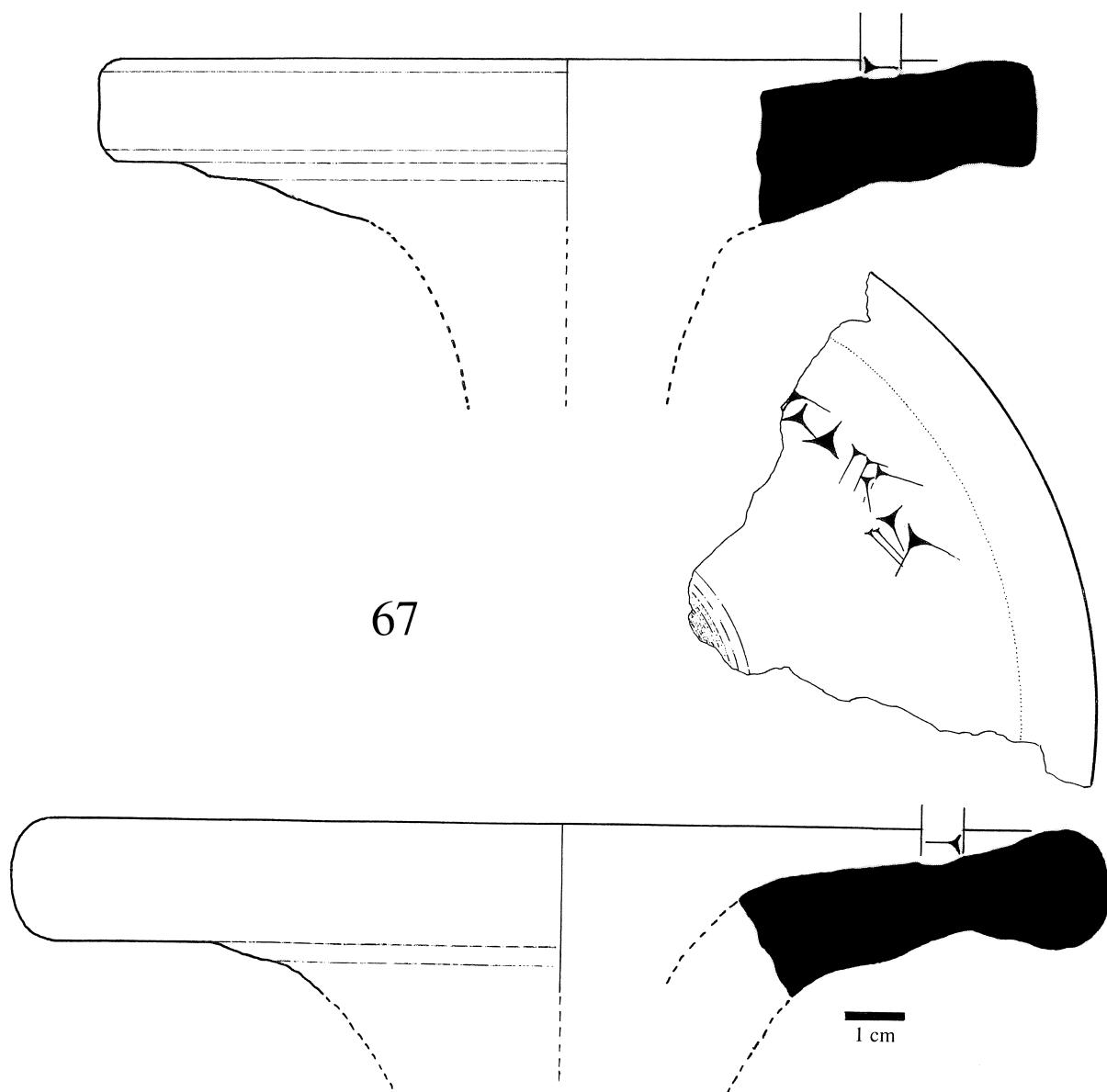




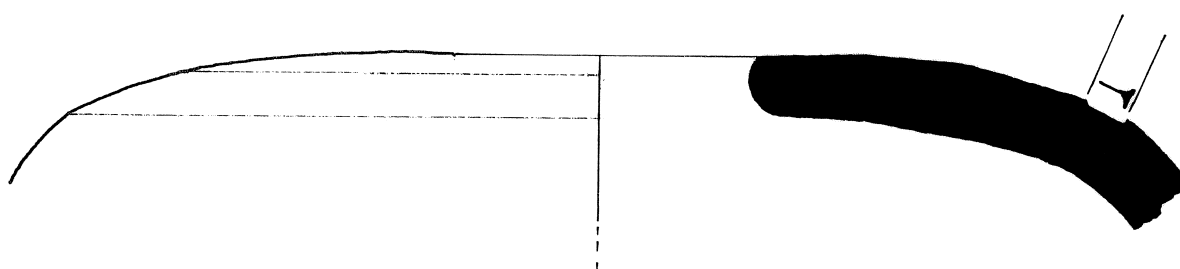
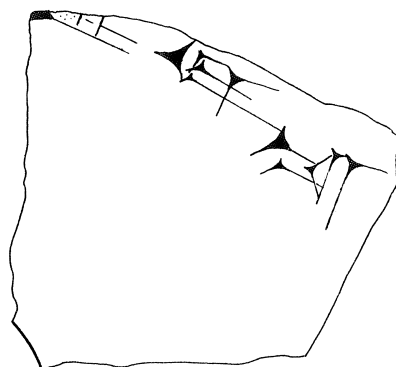
66



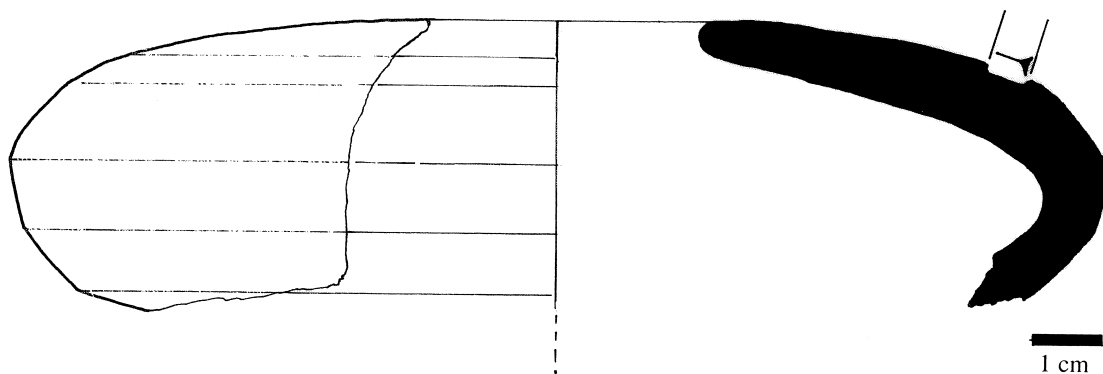
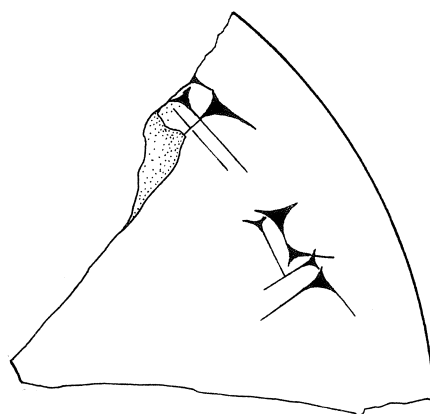
67

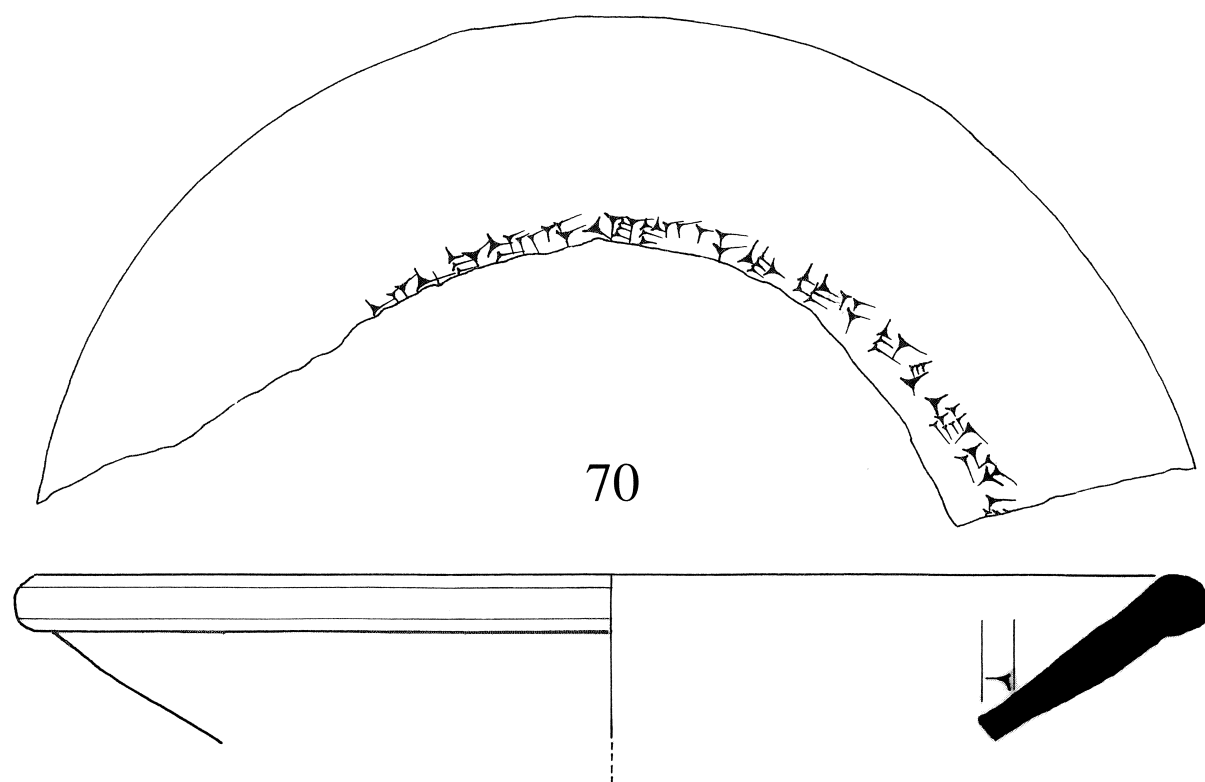


68

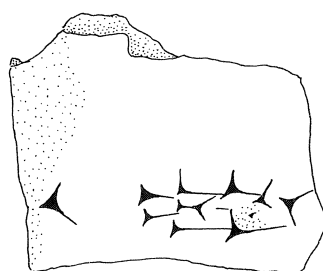


69





71



1 cm